

東方究幻伝

OKSK

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷。

人、妖、様々な存在が共に存在する世界。

そこに迷い込んだのは、死んだ理由を思い出せない

主人公、究 幻佑（きわめ げんすけ）。

幻想郷の住人との交流を深める中で、彼は、本当の自分を見つけることは出来るのだろうか…

(他の二次作品やアニメなどのネタを吸収しまくってますので注意してご覧下さい)

目次

1章 物語の始まり

1話	幻想入り	1
2話	古狼と少年	8
3話	人里へ	13
4話	人里にて	18
5話	初めての弾幕勝負	26
6話	自己紹介	32
7話	弾幕勝負指南①	39
8話	弾幕勝負指南②	45
9話	幻想郷の住人達	50
10話	昼食前の談話	57
11話	昼食、そして旅立ち	64

2章 紅魔館編

12話	道中	74
13話	門番	81
14話	マッシュ・レネ・フィガロ	90
15話	格闘家と格闘家	101
16話	全身全霊	110
17話	紅魔館のメイド	117
18話	時	130
19話	魔法少女達	147

1章 物語の始まり

1話 幻想入り

「ん……んは？」

目を覚ますと、見慣れない場所に倒れていた。

そこは、辺り一面何も無い真つ白い場所。

(目がチカチカするなあ……)

そんなことよりここはどこなのだろうか。

(ん……ああ、僕そういえば死んだんだっけ)

だとしたら、ここは死後の世界とかなのだろうか……

だけど、だとしたら僕はなんで死んだんだらうか。

死んだことは覚えてるのに、

なぜ死んだか、どうやって死んだのかがまったく思い出せない……

「思い出すことを拒むような死に方したのか……」

(とにかく、ここから出る方法とか無いかなあ)

と思つて後ろを振り返ると、

そこには、さつきまでなかった禍々しい紫色の扉があった。

しかも、その扉には、無数の目玉がついていた。

「どー考えても入らない方がいいけど、他に方法がないしなあ…」

そう呟いて、扉を開けると、中にも無数の目玉が浮かんた紫色の空間が広がっていた。

(帰れる確証はないけど、入るしかない)

覚悟を決めて中に入ると…

見知らない森の中に出た…

「(ハハ)…(どハハ)よ…」

これが、最近はやりの、異世界転生とやらなのだろうか…

気味の悪いぐらい暗い夜の森だった。

(何か出てきそうだなー…)

とにかく早くここから出ないと。

(絶対なにか良くないものに出会う。僕の直感がそう警鐘を鳴らしている。)

頼むからそうであって欲しくない、そう思ってその場から動こうとした時、

グルルルルル…

「ひっ……………」

出た。

やっぱり出た。

(まだフラグも立ててないのにいい…)

そんなアホなことを考えつつ、後ろを振り返ると、

体長10メートルはあるんじゃないかという、

銀色の美しい毛を持った狼が屹立していた。

こういう時は、あれだ、あれ。

せーのっ、

「逃げるんだよ☆」

ドタタタタタタタタタタ…

少年逃走中…

「ぜえ……………はあ……………これだけ走れば…」

(どうせなら、FFの世界とかだったら良かったのに…)

悔やんでいても、何も始まらない。

後ろを振り返ると、狼の姿はなかった。

「よし、大丈夫だ！」

「……………ガルル…」

そう思っていた時期が、僕にもありました。

いやはや、後ろじゃなくて前にいるとはね。

ガアルウウウウアアアア！

「げぼっ！」

前を向いた瞬間、丸太のような前足で蹴り飛ばされた。

そのまま数メートル吹っ飛び、木に激突した。

(やばい…意識が…)

迫り来る狼の姿を最後に、意識が途絶えた…

……………あなた、また死ぬつもり？……………

(誰…?)

……………また、何も出来ないまま無様に死ぬつもり？……………

(うるさいな…しょうがないじゃないか、あんなのどうしろって言うんだよ…)

……………力が欲しい？……………

(…ああ。わからないまま終わる、

そんなのは嫌だからね。)

……ふふつ、うまいこと言うわね。

わかったわ、あなたにピツタリの能力を授けるわ……

〈こやつもまた、私の求める者では無かったな〉

銀狼は、気絶している少年の前に立った。

その銀狼は、自分の主人となる強き男を探していた。

探し始めて、もう100年以上経ってしまった。

もうその理由も思い出せない。

自分を退治しに来た人間も、幾度となく

追い払ってきた。

そして、探し人から獲物へと変わったそれを
食べようと近づいた時、
その少年を光が包んだ。

「!!」

異変を感じ、咄嗟に飛び退いた。

「なんだ……これ……」

目を開けると、自分の着ていた服が変化していた。

全身を紺色で統一した服、ボルトの飛び出した肩当て、

左腕の銀色の小手、そして何より……

右手に持った、見覚えのある巨大な剣。

(ここれって……まさか……)

FF7のクラウドになつてる!!?!?!?

「まさか……これが僕の力?」

呆然としてしていると、銀狼が飛びかかって来た。

「えっ、ちよっ、まっ、」

慌てて手に持った大剣、バスターソードを構えると、

突然、自分からオーラが発せられて、銀狼を吹き飛ばした。

「うわわわっ、体が勝手に!?!」

斬符「超究武神覇斬」

謎のカードが目の前に現れ、同時に体が銀狼に突進していった…

2話 古狼と少年

〈こやつ、急に雰囲気が変わった!〉

どうやら、力を隠し持っていた、いや、あの様子だと、
今まさに力に目覚めたようだな……

「面白い、この私その力、見極めて進ぜよう。」

小声で呟くと、まだ呆然としている様子の少年に飛び掛った
〈うっ!〉

いきなり、少年から気のようなものが発せられ、

銀狼は軽く吹き飛ばされた。

〈こやつの力は……いったい……〉

(今…超究武神覇斬って見えたような…)

だとしたら、あの技が出せるのだろうか。

「おおおおおっ!行くぞっ!!」

銀狼の前まで一瞬で距離を詰め、連撃を叩き込む!

へうっ……これはまずいかもしれん……

連撃を叩き込まれ、瀕死の銀狼は、焦りと同時に、
喜びを感じていた。

へこれが……私の探し求めていた男……

だが、このままでは目的を目の前に死ぬことになりそうだな……

11 撃目を当てた時、何故か銀狼の目が悲しげなことに気づいた。

(あの目……1人で寂しい思いをしていたような……)

だが、それを確かめようにも技が止まらない。

気付けば、もう最後の一撃だ。

「クソオオオオツ、止まれええええ
!!!!!!」

へやられる……!!」

そう思つて目を閉じたのだが、

なかなかトドメが来ない。

ゆつくりと目を開けると、

あの大剣が、自分の目の前で止まっていた。

へた…助けられたというのか、こやつに…

と思った瞬間、全身から力が抜け、伏せるように地面に倒れ込んだ…

「おい、大丈夫か？」

とりあえず、倒れ込んだ狼に話しかけた。

しかし、返事がない。

「これはまずいかも…」

何か、回復魔法とか使えないだろうか？

よし、物は試しだ。

「ケアルガ！」

すると、銀狼を緑色の光が包み、瞬く間に傷が癒えた。

「う…あ…」

ん？今誰かの声が聞こえたような…気のせいか？

そんなことは置いといて、

この様子だったら大丈夫そうだな。

いつの間にか格好も元に戻ってるし、さっさとこの森から出よう、とその場から立ち去ろうとした時、

「待ってくれ！」

(え、誰?)

振り返ると、銀狼が立ち上がって

こちらを見据えていた。

「お主、名はなんという？」

「え、あ、究 幻佑です。って、ええええ!？」

狼が喋った!?

「そうか、幻佑と言うのか。私は大神 凜子という。」

「あ、はい。」

いきなりどうしたんだろうか…?

「突然で悪いが、お主について行っても

良いだろうか？」

「え!?ま、まあいいですけど…」

驚きつつも、内心少し喜んでいた。

(よし、この人(狼?) この森に詳しそうだし、この森の出口とか教えてもらえるかな。

あ、でもその前に…)

「すみません、この世界、何って呼ばれていますか？」

「ん？お主、外来人か？」

「ガイライジン？」

「ここは、この世界は、幻想の集う郷、

幻想郷と呼ばれている」

「幻想郷、かあ…」

なんか聞いたことがあるような

気がしないでもないけど…

「そして、その外の世界からきた者を、

外来人というのだ。」

「へえ…わかりました、ありがとうございます。」

（おっと、いけない。出口を聞き忘れてた。）

「それで、まずはこの森から出て、人のいるところに行きたいんですけど」

「ああ、では案内しよう。私の背に乗るといい。」

「ありがとうございます、凜子さん。」

「凜子で良い。あと、敬語じゃなくていいぞ。」

「わかった。じゃあ、お願いするね。」

そう言って、凜子の背中に乗ると、凜子は森の外に向かって走り出した…

3話 人里へ

まだ夜が更ける気配はない。

(朝までには人里には着きたいな…)

と、気になったことがあったので、

凧子に聞いてみた。

「凧子って、なんで僕を襲ったのに、こうして手助けしてくれるんだ?」

「うん? ああ、それはな、元々私は強い男を探していたのじゃ。そして、私がこの男だ、と思った男について行こう、と決めておったのじゃ。」

ただ、何故そのような男を探していたのか、その理由は忘れてしまったがな。」

(…ついでに食事の為ってのもあったけど…これは内緒にしておこう)

凧子がそんなことを考えているとは

露ほども知らない幻佑は、

「ふーん、それで僕が選ばれた、と。」

「まあ、そう言うことじゃ。」

お、もうすぐ出口に着くぞ」

そう言われたので、前を向くと、

灯りが見えてきた。

凜子から降りて、人里に向かおうとした所で、

凜子が狼だったことを思い出し、

「あ、そういえば凜子はどうするんだ？」

「ん？何か問題があるか？」

「いや、さすがにその姿じゃあ目立つところの話じゃ済まないぞ……」

「その点は問題ない。ふんっ」

そういつた瞬間、凜子の体が光りだし……

「どうじゃ、なかなかうまいもんじゃろ」

人の姿になっていた。

銀髪ロングでスレンダー、ルビーのような赤い目、艶のある肌を持ち、なんと僕より身長が高いという、母親……というか、姉のような雰囲気醸し出していた。

しかし、完璧かと言われたらそうではなく、問題が2つほどある。

1つは、ぴんと立った獣耳や、ふっさふさのしっぽが生えていること、もう1つは……

「……裸じゃん！」

「あ…ホントじゃの。」

（わーわーわーっ！見、見ちゃったんですけど！）

まさか…こんなタイミングで見ることになるとは…

というか、凜子さん裸でいることに抵抗ないの!?

「とっ、とにかく、早くなんか着てっ…て言っても何も無いし、どうしろとっ!?!…あっ、そっか!」

とりあえず、来ていた服上半分を一枚脱いで渡し、着てもらった。

…問題は下半分だ。

（あー、こんな時にメニューとか開けたらなあ〜）

とか考えていると、

ピコン

という音がして、目の前に大きなタッチスクリーンみたいなのがでてきた。

「え…本当に開けた…」

ただ、僕の知っているメニューと明らかに違う。

アイテム、アビリティ、ジョブ、装備、ステータスとかその辺はまだ知っている。ジャンクションとかライセンスリングとかもギリギリ許容範囲内だ。

ただそれ以降と自分のステータスが壮絶だった。

「アイテム生成・増殖」「アイテム合成・分解」「アビリティ生成」「アビリティ合体・分離」「マテリア化」「アイテム改造」「モンスター生成」「モンスター合体・分離」「クリーチャークリエイト」と、もうチートかと思った。更に、ギャラリーでアルティマニアや FFWiki の情報が見れたりするって…

ステータスは、HPとMPが異常なほど高く、

その他のステータスも、

上二つ程ではないがとても高い。

自分の能力という欄があり、そこには2つの能力が書かれていた。

『究極の幻想を司る程度の能力』

『あらゆる物を合成・分離・増殖させる程度の能力』

究極の幻想というのは、多分ファイナルファンタジーのことだろう。

それもそうだが、2つ目…なに？さっきチートかって言っただけ、もうチートだよ！

…はっ！驚きすぎて本題を忘れてた。

とりあえず、この能力で何か着るものを…

(…思っただけど、

FFに下半身装備あんまし無くね…？

…あつ、そうか！○○モデルとかなら！)

防具生成『ヤ・シユトラモデル』

獣耳でとつきに思いついたが、あんまり違和感ないな。

(あとはしつぽとかだが…一応聞いておこう。)

「服は何かあったけど、その耳としつぽってしまえたりする？」

「うむ…気に入っているから残しておいたのだが、駄目かの？」

「ああ、里に入った瞬間異質な目で見られる。」

「うーん…まあ、仕方ない。ほいつ」

と、獣耳としつぽが消えた。

(ふう…やつと休める…)

そう思いながら、人里への道を歩いていった…

4話 人里にて

やっと…やっと人里に着いたあああああ！

「ぐすん…えっぐ、ひっぐ、長かったよおおおうわああああああん！」

「おい幻佑、あれだけ目立ちたくなさそうにしたのに、お主が一番目立っておるぞ…」

…うっ！ 周りの視線が痛い！

さすがにキャラ崩し過ぎたか……？

「と、とにかく、宿とか無いか聞いてみるか。」

「とは言うものの、とつくに昼じゃぞ。」

「んー、でも眠いし…」

「そんなもの、テントかコテージで寝れば一瞬じやろ」

「なぜそれを知っている!？」

テントとかって寝てるの一瞬なのに

全快するんだよなあ…

どうなってるんだろ？あと眠気とか取れてるのかなあ？

「試してみるか。」

一旦人里の外に出て、テントと目覚まし時計

(Ⅳのアイテム。使い方が違う。)を生成して寝てみた。

少年&狼就寝中…

「ふああああ、さて、どのくらいたったかな…」

12秒しか経ってなかった。

しかも、HPMPが全快してた。

テント系アイテム万能説……………

「夜更かしの心強い味方じゃな」

「そんなことに使うなよ…」

眠くなくなったので、何か観光スポットみたいなものないかなーと思って、里の人に聞いてみた。

すると、博麗神社に行くといい、と言ってくれた人がいたので、行く事にした。

「博麗か…」

と、凜子が呟いた。

「どうかした？」

「ん？いいや、なんでもないさ。」

教えられた道を行って、神社の石段の前までたどり着いたのだが…

「…地味に長くね？」

「いや、私の記憶が正しければ、もっと長い石段はあるみたいじゃ。」

うーん、さすがに地道に上がるのは

めんどくさいしなあ…

…あつ。いいアビリテイあつたわ。

アビリテイ『ダツシユ』

「よし、行くか。」

「ちよつと待った、私はどうするんだ？」

「え？あつ、そつか、じゃあどうしようか…」

うーん、揺れるけど、バイクで上る？

まあ、物は試した。

アイテム生成『ハーデー||デイトナ』

…無免許運転だけど、まあいつか。

どうせならクラウドの格好で…

少年&狼爆走中…

「ふう、思ったより長くなかったな。」

とりあえず、ハーディを消して、格好も元に戻した。

うーん、MPは…こっただけしたのにとんと減ってない。

(パワーバランスがなあ…)

この先自分が力に溺れないか心配。

「すみませーん、誰かいませんか?」

…返事がない。ただのs「げほんごほん!」

それはダメ。絶対ダメ。

とりあえず、お賽銭いれてみるか…と思ったのだけど、

こっちのお金持ってない…

金とか生成してメダルとか作るか。

「というわけで、メダルを作ってみま

少年工作中…

した。」

(色々ツツコミたいけど、我慢しておくかの…)

よし、少し増やして入れよう。

チャリーン

「おーさーいーせーんー!!!」

…やけに露出度高い巫女が出てきた。

「……?これほんとにお金？」

「あー…自作のコイン。」

「……」

うわー、凄く落ち込んでる…

「一応、純金製なんだけどなあ…」

「えっ?!?!これ全部金!?!」

(凹んだり立ち直ったり、忙しいなあ…)

「…お主、本当に博麗の巫女か？」

凜子が聞いた。

「ええ。真正正銘博麗の巫女、博麗霊夢よ。」

腋巫女…もとい、博麗霊夢が答えた。

「博麗の巫女？」

「説明しておくか。博麗の巫女とは、博麗大結界の維持に必要な役職であり、巫女の力として一部の妖怪の力を制限する能力を有する者のことじゃ。」

「へえ……」

「なるほど、今の博麗の巫女はこやつか。」

「すると先代は……」

「えっ、あなた先代の知り合い!？」

「……昔、色々あつてな。あやつは強かつた。」

「……何があつたんだろう。」

「おつと、まだ名乗つてなかつたな。私は大神 凜子。」

「僕は究 幻佑だ。君は、博麗霊夢だつたつけ。」

「ええ。ところで、こんな所になんの用?」

「いや、特に用はないかな。……あ、そうだ。この世界についていろいろ教えてくれない?」

「いいわよ。お賽銭も貰つたしね♪」

（うーむ、先代もがめつかつたような……）

と、色々聞こうとしたのだが、そこに乱入者が現れた。

「おーつす霊夢、遊びに来てやつたぜ……」

「って誰だあんたら?」

「久しぶりのお客様よ」

「久しぶりって…私は客じゃないのかよ？」

「人んちに来て勝手に弾幕勝負仕掛けてお茶飲んで帰るやつはどこがお客様よ、まった
く…」

「いいじゃねえか、別に。で、あんたらは？」

「僕は究 幻佑、そっちが大神 凜子だ。」

「ふーん。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ！」

「普通の？」

「ああ、そういうのは肩書きみたいなものじゃから、気にしないでいいぞ。」

肩書きねえ…

「早速だが霊夢、弾幕勝負しようぜ！」

「嫌よ、面倒だし。」

「んー…じゃあお前、弾幕勝負しようぜ！」

「えっ、僕？」

「だいたい弾幕勝負って何？」

「問答無用！行くぜっ！」

魔符『スターダストレヴアリエ』

⋮

魔法少女…魔理沙がカードを掲げたと思ったら、いきなり大量の魔法弾が飛んできた

5話 初めての弾幕勝負

「うわうわうわうわっ！」

やばい。咄嗟に出した片手剣二刀で大量の弾幕を打ち落としているけど、いつミスるかわからん。

「言い忘れたけど、被弾数は2回、

スペルカードは4枚までな！」

被弾数って…ルールすらまともに分からんのに…

とにかく、今はこの魔法弾を、躲し、

撃ち落とし、弾き返すことが先決…

ん？魔法を？弾き返す？

…なんでこれに気づかなかつたんだろう。

(不意打ち気味だったけど、なかなかやるな…)

あいつ、私の弾幕を躲しながら

剣2本で弾き落としてやがる。

ただ、攻撃はしてこない。

そろそろ1枚目は時間切れだ。

(スペル切れを狙おうっていう魂胆だろうが、

そうなる前に全力で叩く！)

そして、1枚目が切れた瞬間、

即座に次のスペルカードを宣言した。

魔符「ミルキーウェイ」

必死に弾幕を躲していると、魔理沙がなにか叫んだ。

すると、さっきとはまた違った弾幕が飛んできた。

(ん？弾幕の種類が変わった？)

明らかに弾幕の動きや数が違う。

なんか躲しにくくなって来た。

(確か1回目がスターダスト……何とかで、

今のはミルキーウェイって言ってたような……)

とにかく、あれが魔法弾ならあの魔法を試してみるか！

「リフレク！」

唱えた瞬間、自分の周囲を反射壁がおおい、それに当たった魔法弾が次々と弾き返り、魔理沙の方へ飛んで行った。

「成功！」

一方魔理沙は、

自分の弾幕が弾き返ってこつちに飛んできていることに気がついて、慌てて回避した。

「うわっ、ちよっ、いきなりなんだぜ!？」

あまりに突然の事だったので、躲しきれず、

自分の弾幕で被弾してしまった。

更に、そのままスペルブレイクしてしまった。

「ぐっ……さすがにこれはまずいぜ……」

だが、次と最後のスペルで2回稼げばいい!

懐からミニ八卦炉を取り出し、宣言した。

「行くぜっ! 恋符『マスターパーク』!」

「よし、これで被弾1…でいいのか?」

うーん、よくわからん。

そうこうしているうちに、魔理沙が何かを取り出した。

「?なんだあれ?」

なんか八角形の小物入れみたいな…

「行くぜっ! 恋符『マスタースパーク』!」

(!!) なんかヤバいのくる!)

と思い、躲そうと走り出した瞬間、魔理沙の手に持っていたなんか(…後で聞いたら、八卦灼って言うらしい)

から、7色で極太のレーザーが発射され、

躲しきれずに左手足に食らってしまった。

「ぐっ…:…なんだよ今の…」

まるで波動砲のようなレーザーだった…

というかそれより、左手足に力が入らない。

(このままじゃあ、

動けない↓スペルカード食らう↓被弾数2↓負ける!

別に負けてもいいけど、それじゃ僕の気が済まない！

それに、さっきのスペルカードを見て

思い出した奴がいる！

「よし、命中！」

しかも、あいつはもう動けない。

こっちのスペカは残り1枚。

「この勝負、もらった！」

と、魔理沙が最後のスペカを使おうとした途端、

「そいつ」は出て来た。

モンスター生成『オメガ』

それは機械で、黒みがかった楕円体の胴体から足が4本、目のようなものがひとつ生えていた。

「なに……あれ……」

最初の頃は呆れ半分で退屈しのぎになるかと思つて観戦していた霊夢だったが、オメガを見て絶句した。

(あやつ、とんでもないものを隠しておつたな…)

自分に勝つたくらいだから、弾幕勝負くらい楽勝だろうと思つてそのままにしていた凜子も、さすがに驚いた。

「な、なんなんだぜ、それ！」

「これか？これはな、古代ロンカ文明の遺した、

最強の兵器さ！」

「はっ、反則だろ！そんなの！」

「生憎、ルールをよく知らないものでね！

行くぞ！オメガ！波 動 砲！」

最終兵器『波 動 砲』

「ぎにやあああああああ!？」

…その日、幻想郷では、博麗神社からまっすぐ天に向かつて伸びる光が観測されたと
いう…

6話 自己紹介

波動砲を食らって気絶していた魔理沙が目を覚ますのに、少しかかった。目を覚ますなり、こっちに食ってかかってきた。

「だあーっ！あれは反則だろー！」

「魔理沙、ルールすらまともに分かんない相手に

不意打ちしたあなたが言えることじゃあないんじゃない？」

「うっ…それでもだ！」

「はいはい、負けたのに文句言わない。」

「それにしても、ルールも知らないのに

よく魔理沙に勝てたわね。」

霊夢がこちらを向いて言った。

「うーん、それは僕の実力と言うより

能力のおかげだと思う…」

「あなたの能力って？」

「あ、まず、『究極の幻想を司る程度の能力』っていう能力で、僕外来人なんだけど、元の世界でやってたゲームの全てが使えるようになる能力なんだ。」

「ふうん…ゲームって言うのは前紫に聞いた気がするけど…よくわかんないわ。でも、あんなのが呼び出せるっていうのは凄いわね。」

「そうじゃの、私が倒されるくらいだものな。」

「で、2つ目が…」

「ちよつと待て、お前能力2つ持ってたのか!？」

魔理沙が心底驚いていた。

「あー、うー、うん。さつきは使ってたけど、『あらゆるものを合成・分離・増殖させる程度の能力』っていう能力ももってるんだ。」

「えっ、じゃあさあ、さつき純金のメダル作ったって

言ってたのはどうやったの?」

「ゲーム内で金が作れるから、それを使って。」

(なら、それを使えば、お金持ちに…)

「ただ、これを使って金儲け、

とかは考えてないかな。」

「……チツ」

霊夢さん、お金儲けする気満々だったらしい…

「そう言えば、そつちの彼女は？」

人間ではないようだけど？」

さすが、博麗の巫女だ。

凜子が人ではないことを見抜いていたらしい。

「私か？ 私は大神凜子という。一応これでも、

昔神に祀り上げられたことがある。」

・
・
・

…え？ 初耳なんですが…

「…凜子、そんなこと一度も聞いたことないけど…」

「それはそうじゃ。話しておらんかったし、

別に聞かれなかったからの。」

確かにそれはそうだけどさあ…

「…あなた一体、何者？」

霊夢がこちらに聞いてきた。

何者かと問われましてもね…

「まあ、この幻想郷には現人神がいるけどね。」

「ふむ、先輩として会っておきたいものじやの。」

「確かに、挨拶回り位はしとくべきかな…」

「これからやるべきことは沢山あるな。」

「それでさ、霊夢」

「何？」

「弾幕勝負とかスペルカードについて

教えて欲しいんだけど…いいかな？」

「ええ、いいわよ。でも、時間は大丈夫？」

確かに、もう日が暮れてきた。

「今日どこか行く当てはある？」

「うーん…宿に泊まるつもりだったけど、

お金ないしね…」

「じゃあ、うちに泊まってかない？」

「え!？」

何故か魔理沙も驚いた。

「何よ、私が人を家に泊まらせるのが

そんなに珍しい?」

「だって…あの霊夢が…非情さでは前に出る者のいない、あの霊夢がだぜ!」

「魔理沙、私のことをなんだと思ってるの!」

「幻想郷一の金巫女」

「ちよつと!金巫女じゃないわよ!

あとそれとこれは関係ないじゃない!」

「…まあ先代もかなりの金巫女だったみたいだし。

(ボソツ)」

…とにかく、泊まるところとかなくなって良かった…

神社に入ると、霊夢が食事を作ってくれた。

「霊夢、どうしたんだ!？」

いつもはこんな食事じゃないのに!」

と魔理沙が言う割には、味噌汁や焼き魚など、

だいぶ庶民的な和食である。

てゆーか何故か魔理沙まだ居るし。

それに、いつもこんな食事じゃないなら、

普段はどんな食事なのか…（もしくはただ単に今回の食材のグレードが高いだけなのかな？）

「ふふん。内緒よ♪」

多分僕の純金メダルだろう。

まあ、ここはこの食事、

ありがたく頂戴させていただきます。

「じゃあ、また来るなー！」

「しばらく来なくていいわよ。」

「なっ…！」

仲がいいんだか悪いんだか…

その後、霊夢に布団を借り、寝ることにした。

（なんか激動の1日だったな…）

霊夢や魔理沙、そして凜子に出会えた。

（凜子には襲われたけどね…）

さて、明日からはやる事が沢山だ。

弾幕勝負について教えてもらっただけじゃなくて、

仕事とかも探さなくちゃならない。

「よし、寝るか！」

明日に備えて、深い眠りについた：

スキマの中にて……

「ふふっ……彼の『可能性』、底知れないわね……」

「しかし紫様、あのような強大な力を放置しておいてよろしいのでしょうか？」

「大丈夫よ。もし彼が幻想郷にとって脅威となるならば、その時は……」

「……幻想郷の全てが、彼を排除するだけよ。」

7話 弾幕勝負指南①

「……………け、……………佑」

（うーん……あと5分……いや30分……）

「……ん佑、幻佑！」

「うーん……あと1時間……………」

「いつまで寝てるつもりじゃ!!」

「ウボアー!!」

狼の凜子に蹴り飛ばされた。

「あつ痛つつ……………」

2回目で能力のおかげで意識は飛ばなかったけど、

やっぱり慣れないなあ……

（慣れるものでもないけどね）

朝食を食べた後、

凜子が「散歩に行ってくる」と言って出かけたので、

神社には霊夢と二人っきりになってしまった。

「じゃあ、スペルカードルールについて説明するわね。」

「スペルカードルールとは、

人間でも神様と同等の強さを発揮できるように

出来た決闘のルールのことよ。

もちろん相手を殺してはダメ。

妖怪の争いが幻想郷の平和を壊さないよう作られた…

っていうか、発案者は私なんだけどね。」

「へえ…（霊夢って、意外とすごい人だったんだ）」

「弾幕勝負は、スペルカードという契約書に

則って行われるの。こんな感じのね。」

そう言って、霊夢はどこからか、

『霊符 夢想封印』と書かれたカードを取り出した。

（?こんなカード、どっかで見たような…）

ああ、昨日魔理沙が使ってたな…って、

「あっ!」

「?どうかしたの?」

「僕も一枚、持ってるかも。」

それは凜子と初めて戦った時の、

技が出た時に現れたカードである。

あの後どこに行ったか分からないけど、

アイテム欄にあるかな…と思ってメニューを開き、

探してみた。

「あなた、そんなことも出来るのね…」

・
・
・

「…あつたー！」

僕はそのカードを具現化した。

「ふうん…『斬符 超究武神覇斬』、ねえ…

どんな感じの技なの？」

「うーんと…実際に見せた方がいいかな。

カカシかなんかないかな？」

「カカシなんてないわよ…私に使ってみたら？」

「えっ!? さすがに…それはまずいんじゃない?」

「大丈夫だ、問題ない。」（大問題だよ）

「じゃあ…」

そう言つてバスターソードを出し、構えた。

「じゃあ…行くよ…」

斬符『超究武神覇斬』!」

スペカを宣言し、一瞬のタメの後、

霊夢に斬りかかった。

「!」 純粹な近接技!」

まあ、そりゃあそうだ。

FFの剣技に多段弾幕型の技なんてほとんどない。

霊夢は一瞬戸惑つたものの、

僕の剣撃を難なく躲して行つた。

（うーん、やっぱりほかの攻撃がない分

スイスイ躲されるな…）

そんなことを考えていると、14撃目が終わり、

ラストのタメに入った。

この技のタメの長さはネックだなあ…

そしてラストの一撃も躲された…のだが、

ラストの振り下ろしが地面に直撃し、爆発が起きた。

それに巻き込まれて、霊夢が軽く吹っ飛んだ。

「ごめーん！大丈夫？」

「いたた…ええ、大丈夫よ。と言うか、

最後の爆発のこと先に言つときなさいよ。

格好つかないじゃないの。」

「なはは…こつちもすつかり忘れてた…」

と言うか、当たらなくても爆発するんだ…

「で、さっきのが僕の初めてのスペカなんだけど…」

「うーん…とりあえず弾幕勝負には向いてないわね。」

だよなあ…当たる可能性も低いし…

そもそも、FFの技・魔法は全体的に単発で、

相手を確実に倒すために威力に重点を置いている。
つまり量より質である。

対してこの世界の弾幕は、逆に質より量である。

さらに、相手を殺してはいけない。

なので、FFの技はこの世界での戦闘には
向いてないかもしれない。

「かと言って魔法も単発ものだし…あつ。」

「ん？どうかしたの？」

「もう一つの能力のこと忘れてた…」

8話 弾幕勝負指南②

ここで僕のもう一つの能力、『あらゆる物を合成・分離・増殖させる程度の能力』について説明しておこう。

名前の通り、あらゆる物を合成・分離・増殖させることが出来る。

合成することによって全く違うアイテムに変化したり、

合成に失敗したアイテムを分離したり、

既製品を素材に分離したり、

上記の物などを好きなだけ増やしたり出来る。

しかも、FFには素材となるアイテム、

解体すれば貴重な素材に化ける武器などが沢山ある。

この二つの能力の組み合わせは

もうチートやチーターやんと言われても文句が言えないレベルの相性の良さである。

…話を戻そう。

この能力と魔法を使えば、擬似的…いや、

場合によっては実戦的な弾幕が作り出せるかもしれないということである。試しに、ファイアでやってみる。

「ファイア！」

唱えた瞬間、火球が現れた。

「ほっ！」

それを保持したまま、能力を使って火球を増殖させた。

「よし、こんなものかな！」

すると、目の前に1枚のカードが現れた。

『火符 ファイアボール』

「よーしっ！この調子でじゃんじゃん作るぞー！」

「早っ……こんなに早くスペカを作るなんて……」

この少年は一体何者なのだろうか……

ほとんど、いや、全く戦闘経験が無いはずなのに、

幻想郷の中では有数の実力者である魔理沙や

あの凜子という狼に勝つことが出来るなんて……

彼自身は能力のおかげだと言っていたが、

あの動きからは能力だけではない、

天性の才能のようなものを感じた。

(でも、彼は……幻想郷にとって……)

脅威となりかねない?)

彼の能力はまだ未知数。でも、彼がその気になれば、

幻想郷を崩壊させる事も可能なかもしれない……

(紫は……どうするのかしら……)

1人でそう悩む霊夢の事など気にかけて、

幻佑はどんどんスペルカードを作って行った。

特に青魔法は、バリエーションが多く

様々なスペルが出来た。

さらに魔法だけでは飽き足らず、各技や魔法剣、

召喚獣にも手を出し始めた。

そして、その最中に「あること」を発見した。

「ふーっ、疲れたー！」

約4〜5時間ほどにわたって

スペカを作り続けたせいで疲労がたまったのか、
幻佑はその場に倒れ込んでしまった。

一方霊夢は、召喚獣を呼び出した辺りから
信じられないようなものを

見てしまったかのような顔をして固まっていた。

まあ、普通の人(?)からすれば召喚獣なんて
想像も出来ないような存在だもんな…

「本当、貴方には驚かされてばっかりだわ…」

霊夢が呆れ半分、驚き半分で言った。

「まあ、こんなもんよ！」 幻佑が言った。

(寝転んだままだからカッコつかないけど…)

ぐぎゆるるるる…

「お腹空いた…」

「よっと、」

幻佑は起き上がると、霊夢に言った。

「お昼、どうする？」

「うーん…作るのも面倒だし…食べに出る？」

「じゃあ、凜子が帰って来るの待って出よつか？」

「帰ってこなかったら？」

「すぐ帰ってこなかったら…」

残念だけど、置いていこつか。」

その時、鳥居の方から、

「誰を置いていくつて？」

凜子の声が聞こえた。

こうして、3人は、揃って昼食を食べに人里に降りた…

9話 幻想郷の住人達

さて、人里に降りてきた一行。

「あんた達、何か食べたいものはある？」

と霊夢が聞いてきた。

幻佑は、

「うーん、これが食べたい！」

…って言うのではないかな。

お腹ペコペコで何か食べたいけど」

凜子は

「うむ、私は基本的に肉しか食べて来なかつたからな…

スイーツとやらを食べてみたいかのー」

と返答。

「スイーツって…食後に食べるものでしょ…」

「しかし、人の姿でいるのはかなり不便じゃの…

早く走れないし、妖力の消費が多いせいか

腹が空きやすくなっておるしの」

「へえ…：色々と大変なんだね…

あつ、そう言えば、霊夢」

「どうしたの？」

「この人里にも、妖怪とか、

そういう類のものっているの？」

と聞くと、すぐに

「ええ。いるわよ。

自分の正体を隠してる奴も隠してない奴もね。」

そう言ったとき、後ろから、

「おお、霊夢じゃないか」

と声をかけられた。3人が振り向くと、

青白い髪の、頭に…：帽子？を乗せた女性が立っていた。

その後ろに、子供たちを4人連れていた。

「霊夢の知り合い？」 幻佑が聞いた。

「まあ、そんなところね。

ちなみに彼女たちもそういつたものの類よ。」

「へえ…」

そんな話をしていると、その女性は幻佑たちに気が付いて、

「うん？そちらのお二方は？」

と霊夢に聞いた。

「幻想郷外そとから来たのと山から出てきた狼よ」

と幻佑たちのことを大雑把に説明した。

「自己紹介しますね。」

僕は究 幻佑です。」

「大神 凜子じゃ。」

二人が自己紹介した。

「ふむ…幻佑に凜子か。よろしく頼む。」

私は上白沢 慧音という。

近くの寺子屋で先生をやっている。」

「僕は究 幻佑です」

「大神 凜子じゃ。宜しくしてたも」

「凜子そんなキャラだっけ……」

「ふむ……凜子に幻佑か。」

私は上白沢 慧音という。

近くで寺子屋の先生をしている。」

「先生か……ということは、後ろの子達は
教え子さんですか？」

「ああ。」

みんな、挨拶しなさい。」

そう言われて、子供達が前に出てきた。

まず、水色ワンピで、背中に氷のようなもの生やした子が自己紹介した。

「アタイはチルノ！さいきよーの氷精よ！」

「氷精……ということはこの子、妖精なのか。」

「妖精の割には力を持つてるみたいじゃがの。」

「おーい！ムシすんなー！」

次に、黒ワンピで金髪赤リボンの子が、

「私はルーミアだー。よろしくなのだー。」

「うん。よろしく。」

すると突然ルーミアが涎を垂らして、

「お兄さん、おいしそーなのかー。」

と少しはにかんだ。

「…ふえっ？」少し動揺する幻佑。

「ルーミアちゃん！それ色んな意味で

誤解を招くから！」

隣にいた黄緑色の髪の子が

突っ込んでくれた。そしてその子も、

「あ、私は大妖精です。大ちゃんって呼んでください。」

と自己紹介した。

最後に、緑の髪で四人の中で

1人だけズボンの子が

「私はリグル・ナイトバグです。よろしくお願いします。」

「…凜子、『紅一点』の対義語ってなんだっけ」

「なにアホなことを言っておる。」

「こやつは女子ぞ。」

「…え、そうなの？」

「そうですよ!?!私女の子ですよ!?!」

「いやごめん、どうしても色々」と

男の子要素が多くて…」

と幻佑が言うのと、何故か自分の胸を触り始め、

その後、

「そうですよね…」

やっぱり男の子にしか見えませんよね…」

と地面に体育座りで座り込んだ。

(ん…判断材料は他にもあると思うんだけど…)

「今のはお主が悪い」

「ええ…」

そんなやり取りを他所に、霊夢と慧音は話をしていた。

「そういえば、霊夢はなんでここに降りてきたんだ?」

「お昼を食べに来たのよ。たまには外食もしないとね。」

「…:…霊夢、どういう風の吹き回しだ?」

それにきちんと代金は払えるんだろうな?」

「失礼ね。きちんと持ち合わせはあるわよ。」

昨日思いがけない収入があつたからね♪」

「そうか…ならいいけどな。」

「そつちはどうなのよ」

今度は霊夢が聞き返した。

「ああ、今午前の授業がおわつて、ちようどこちらも

お昼にしようと思つていたところだ。」

「へえ、何を食べるの？」

「お蕎麦にしようかなかなと思つている。」

「あら、じゃあご一緒しようかしら」

そんなこんなで、一行は蕎麦屋へと向かうのであつた…

10話 昼食前の談話

「で、ここがその店か」

一行がやってきたのは、里でも有名な所らしいそば屋。

「よしーそば食うぞー！」

チルノがはしやぎながら中へと入っていき、

「こちら、落ち着けっ」

慧音先生と他の子供達も中へ入っていく。

霊夢が、

「この蕎麦美味しいのよねー。」

最後に食べたの2年前だったかしら」と言いながら店に入っていた。

「そこまで食うものに苦労しとったのか…」

まあ儂もかれこれ数十年はあの森に籠つとったしの。

久しぶりの人里の食べ物は楽しみじゃ」

と凜子も続いた。

最後に、

「みんな大変なんだね…」

そう言いながら、幻佑も入っていった。

店内に入ると、各々がそれぞれの注文をした。

待っている間に慧音が、

「君はどこからやって来たんだい？」と質問してきた。

「こことは別の世界からです。」

そう答えると、慧音は一瞬目を光らせて、

「ほう、すると君は外来人かい？」と続けて聞いてきた。

「はい。…でも、死んでここに来たことと能力の元ネタについて詳しいこと以外ほぼ何も覚えてないんですけどもね」

そう言うのと慧音はとても残念そうに、

「そうか…悪いことを聞いてしまったな」

と言った。

慧音は、そのまま視線を凜子の方に向けて、

「貴女は、大神凜子…でしたよね？」と聞いた。

「うむ、いかにも」少し得意げに答える凜子。

慧音が凜子の名前を知っていることに少し驚いた。

幻佑が「凜子って有名なんですか？」と慧音に聞くと、

「ああ、というか彼女は知る人ぞ知る大妖怪だよ。

妖怪の山を降りるまでは鬼に並んで最強の一角と謳われていたくらいだ。」と答えられた。

「あんた、そんなに強かったのね…」

素直に称賛する(?) 霊夢。

「よせよせ、昔の話じゃよ。」照れる凜子。

「へえ…」

(じゃあ、あの時はめっちゃ手加減してもらってたんだ…)

それを聞いて少し戦慄した幻佑であった。

「そういえば、2人ともどんな出会い方したの?」

霊夢が口を挟んできた。

「あれ、まだ霊夢にも話してなかったっけ」

「詳しくは聞いてないわよ」

「そうだったっけ。じゃあ、話すかな。」

そう言つて、幻佑は当時のことを詳しく説明した。

気がついたら森の中に放り出されてた事。

凧子に追いかけ回された事。

凧子に食べられそうになつて、能力が発現した事。

その後、なんか妙に凧子に懐かれた事：は言わなかった。

そんなことはどうでも：よくはないんだろうけども。

話し終わつて、

慧音は「ふむ：能力発現か：ここ最近ほとんど見なかった事例だな：」と興味深そうにしていて、

霊夢は「ここに来てから発現：？それにしちやあ戦い慣れてないかしら：？」

とブツブツ呟いていて、

凧子はというと、

「成程：：道理で逃げ回っていたのか。」

それにしても、空腹で弱っていたとはいえあそこまで追い込まれるとは思わなかった

のう」

と回想していた。

「とうか一体誰なのよ、あんなデタラメな能力こいつに発現させた奴…」

霊夢が自分を柵に上げて愚痴った。

「ん、そんなに凄いのか、彼の能力というのは」

慧音がそれを聞いて霊夢に訊ねた。

「驚きを通り越して呆れてるわよ。今朝スペルカードルールについて説明したんだけど、それからさつきまでずっとスペカ作りしてたのよ？」

私から言わせてもらえばまだ単調なものが多いけど、それでも二、三百は使えるものがあるわよ」

それを聞くと慧音は目を見開いて、

「!? そんなに作って大丈夫なのか？」と霊夢に聞いた。

この大丈夫か、というのはルー的な話と、そんなに作って幻佑の消耗はどうなのかという事である。

「数枚選んで使うように釘は刺してあるし、

こいつかなりケロツとしてるわよ…」

霊夢が少し気だるげに言った。
と、凜子が、

「そういえば昨日から気になっておったんじやが、すべる…かーどとか言ったかの。結局どんなものなんじや?」

「こちらに尋ねてきた。」

「知つてると思つただけど…」

「そうね、貴女が籠つてる間に制定されたルールだしね…」

「説明した方がいいかな」

「3人説明中」

「ほう、つまりは殺し合いを防ぐと共に、人と妖の力の均衡を保つ役割を果たしておるのか。」

「まあ、そんなところね。」

軽く説明を終えて、凜子も何となくルールについて分かってくれたみたいだ。

「後で儂にも教えてくれるかの?」そんなことを言い出した凜子。

「いいよ。霊夢も手伝ってくれるかな?」

「多分暇だし、いいわよ」

そんな受け答えをしていると、注文したそばが来た。
「それじゃ、食べようか！」

『いただきます!!』

11話 昼食、そして旅立ち

「美味しいっ！」

素晴らしい味である。食レポは得意ではないが、

鰹出汁のしつかりした風味と、

手打ちのそばの程よい風味の合わさり方が素晴らしい。

値段も割と手頃らしいので、（霊夢の）お財布にも優しい。

まさに完璧なそばである。

隣を見ると、凜子がそばをほとんど完食しかけていた。

早っ！しかも、貴女特盛り頼んでましたよね…？

色んな意味で（特に霊夢の財布が）心配になってきた幻佑であった。

「それで、今後はどうするつもりなんだ？」

「今後、ですか」

慧音からそう聞かれて、確かにそうだと思った。

挨拶回りはしようと思っっているが、当てなんて無い。

あと、人里以外にも色々見て回ってみたい。

その旨を慧音に伝えると、

「ふむ…私にも当てがない訳じゃあないんだがなあ…」

と苦い返事を返された。

「無いわけじゃない、というのとは？」

「ああ…外は普通の人間には割と危険な所が

多いんだよ。人里の中ならまだいいんだが、

魔法の森や紅魔館、迷いの竹林に妖怪の山、

私は行ったことがないが地底だったり、

月にも住人がいるらしい。」

そんなふうに解説してくれた。

「へえ…色んなところがあるんですね」

そんなことを言いながら、内心少しワクワクしていた幻佑。

(月かあ…行こうと思えば行けるのかな?)

少なくとも2艇、行ける船の存在は思い出した。

(→→ルビ)

まあ、まだ魔力不足で無理だろうけれども。

「幻佑なら大丈夫じゃろうよ」

隣からそばを完食した凜子が口を挟んできた。

「何せ、儂に1度勝っておるのだからな！」

「うわっはっはっは！」

自分が負けたことのはずなのに誇らしげに言う凜子。その自信はどっから湧いてくるんだろう…

「んー？幻佑って強いのかー？」

「多分そうだな！でも、さいきよーのあたいのの方が強いんだぞ！」

「見てるだけじゃ、そうは見えないけれどね…」

「霊夢さんが愚痴るくらいには

強いんだよ思うよ、多分」

それを聞いて子供たちも反応した。

（子供と呼んでいいのかどうかはさておき）

一応全員が妖精だったり妖怪だったりするから、実力はあるんだと思う。

チルノなんかは妖精の中でも結構強いんじゃないだろうか、と何となく思う幻佑だった。

そんな中、霊夢が、

「じゃあ、今からでも紅魔館に行ってきたら？」

と言いつ出した。

「え…大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。挨拶回りでドンパチやらかす訳じゃないんだろうし。

もし弾幕勝負を申し込まれても、

ほぼスペルカードルール内で

魔理沙に一勝してるとだし問題ないわよ。

それに、事前に何も言わなくてもあの吸血鬼なら分かかって貰えるでしょ」

「それはそうだが…ちよつと待て、魔理沙に勝った!？」

霊夢の言葉にやや動揺した慧音。

正直あれを勝ちって言っているのだろうかと思うのだが、まあ問題ないのかな？

「ええ。まああいつも

少し幻佑を舐めてたみたいだけれどね。

あ、私はまだ負けてないわよ。そもそも勝負してないけどね」

と霊夢が言った。

うーん、最後の方が強調されてた気がするよな…まあ、気にしたら負けである。

「でも、今からっていうのは大丈夫なのかな。」

凜子にスペルカードルール教えないといけないし」

「その点は問題ない。霊夢に教えて貰えばよい。挨拶回りに儂が付き合っても仕方ないじゃろうさ。」

楽しんでくるといい。あと店主、おかわりくれ」

と、自然な流れでおかわりを頼みながらも

凜子がそう言ってくれた。

「じゃあ、お言葉に甘えて行つてこようかな？」

「おう。気兼ねなくな」

「私の財布は気にかけて貰えないかしら……」

霊夢が不満そうに言ったが、それは多分凜子には無理な話である。

「それで、紅魔館つてどこにあるんですか？」

「で、紅魔館つてなんじゃ？」

幻佑と凜子、2人が同時に質問した。

「あー、まず紅魔館の説明が先かしらね……」

霊夢はそう言うと、2人に話し始めた。

「まず紅魔館ってというのは、霧の湖にある真つ赤で⑨デ…とても大きい館のことよ。」
(⑨デ…? 何て言おうとしたんだろ)

「霧の湖か…昔はあそこには何も無かったがな」

「アイツらがやってきたのは割と最近だからね。」

「アンタが知らなくても無理はないわよ」

「それで、誰が住んでるの?」

「あそこの主はレミリア・スカーレット。」

「吸血鬼よ。」

「吸血鬼…?」

「そう。昼間日の元に出ることが出来ないけれど、

夜に活性化し、人の血を吸う怪物。

大蒜に流水、十字架、太陽の光に弱い。

その代わり、影になって移動したり、

人間を遥かに超える力を有する存在。

一般知識としては、そんなところかしらね」

「うーん、改めて聞くと大丈夫なんだろうかと心配になってきた。

最悪、『お前の血をよこせ』なんてことにならないか心配だ。」

そんな幻佑の心の声を聞き取ったのかは知らないが、霊夢が「まあアイツは血を吸うの苦手らしいし、

仮に襲われてもあんたなら余裕で生き残れるでしょ。」

…なんか買ひ被られてる気がするけど、霊夢がそう言うなら大丈夫なんだろう。多分。

「吸血鬼…なんだか気になってきたのう。

スペルカードルールを覚えたら押しかけてみるかの」

凜子が興味ありげな顔をして物騒なことを言い出した。

「やめたげなさい」 霊夢、即答である。

「それで、霧の湖ってどこにあるんだろう」

肝心なことを聞いてなかった。

霧の湖自体どこにあるのか分からないのでは行きようがない。

が、大体こつちの方角とかいいう説明で目的地に辿り着くのはこの幻想郷では難しいと思われる。

そもそも、何処に限らずとも幻佑はそういう案内をされるのは苦手である。

どうしたものかと思案していたら、

「チルノ達に案内させようか？」

慧音先生が助け舟を出してくれた。

「いいんですか？」

「ああ、いいよ。元々今日は授業を午前中までの予定にしていたからな。みんなも良いだろう？」

慧音がチルノ達に聞くと、

「ああ！いいぞ！」

「大丈夫だー」

「分かりました」

「いいですよー」4人ともOKしてくれた。

「ありがとうございます……！」

幻佑は慧音先生と、4人に感謝した。

店を出ると、相変わらず晴れた空が広がっていた。

「それじゃ、行ってくるよ」

人里から少し離れて、

幻佑が霊夢と凜子に言った。

「気をつけ……ないでも大丈夫かしらね」

「うむ、大丈夫じゃ」

凜子に謎のお墨付きをもらった。

これ以降勝負事に負けたら怒られそうなんだけど、

そつちはそつちで大丈夫かなあ……

「今更思ったんだが、幻佑は空を飛べるのか？」

慧音が聞いた。

「あ、ええ。やろうと思えば魔法の応用で」

「魔法が使えるのか……もしかしたら、異変解決に力を借りる事態が来たりするかもしれないな。」

「それもそうね。代わりにやってもらおうかしら」

霊夢がそんなことを言い出した。

自分の仕事は全うした方がいいんじゃないかなあ……

「凜子、霊夢に迷惑かけないでね」

そう言つて、幻佑の体が風系魔法とレピテトの応用で空中に浮かび上がった。

「おおおー……すごいな！」

チルノが興味深そうに声を上げた。

「じゃあ、案内よろしく」

「わかった！」

こうして、5人は人里を後にした――

12話 道中

「そういえば、みんなの能力ってどんな感じなの？」

紅魔館へと向かう空の道すがら、

幻佑は大妖精にそう聞いた。

「少し解説すればいいですか？」

「うん。お願いするよ」

「分かりました。」

大妖精はそう言って、話し始めた。

「まず私の能力ですが、実はありません」

「この言葉に幻佑は驚いて、

「え、そうなの？」と呟いた。

「はい。能力と名付けて言うなら

『そよ風を操る程度の能力』と言った感じですかね」

そよ風か…かなり見た目にあっているとと思う。

優しい感じが特に。

「ルーミアちゃんは『闇を操る程度の能力』ですね。

自分の周りに闇を作り出すことができます。

その闇は、光も通しません。

…でも、ルーミアちゃん自身も闇の中では何も見えならしいですよ」

「諸刃の剣…ってやつなのかな」

結構強い能力かも…って思ったけど自分にも見えないのか…

「ルーミアちゃんは能力もだけど、純粋に力持ちなんですよね。

この間なんか猪を素手でなぎ倒してましたし…」

「へえ…」

闇に引きずり込んで食べる、そんなスタイルなのだろう。

「チルノちゃんは『冷気を操る程度の能力』ですね。

水を凍らせたり、それを飛ばしたりできます。

よく霧の湖で蛙を凍らせて遊んだりしてますね」

「蛙エ…」

カエルの子可哀想…あ、まだ出てきてないか。

「そんなチルノちゃんもかわいい…うえっへっへ」

アナタ絶対そんなキャラじゃないでしょうに…

「最後に、リグルちゃん的能力は『蟲を操る程度の能力』です。

あらゆる虫を使役することが出来る能力ですネ」

虫…蜂とかGとか使役できるのはかなりヤバそう…

「ちなみにリグルちゃんは蛍の妖怪ですよ」

「蛍かあ…最後に見たのっていつだったっけ」

近年都市開発でめつきり姿を見なくなつた蛍。

自然豊かな幻想郷にはいっぱいいるんだらうなあ…

「とりあえず、私たち4人はこんな感じですよ」

「うん、ありがとう」

解説してくれた大妖精に感謝。

「そういえば、あなたの能力って何ですか？」

今度は大妖精の方が聞いてきた。

「あ、まだ説明してなかつたね…」

そこで今度は幻佑が説明をし始めた。

「僕的能力は、

『究極の幻想を司る程度の能力』

と

『あらゆる物を合成・分解・増殖させる程度の能力』

の2つだよ」

「能力が2つ…ですか？」

驚きつつもさらに質問する大妖精。

「まあ、そうだね」

「どんな能力なんですか？」

「1つ目は…ええつとね…」

（うーん…外の世界のゲームって説明して伝わるかどうか…）

そのまま説明してもほぼ100%伝わらないので、

言い方を思案する幻佑。

「幻想郷とは別のいくつかの世界の技能や魔法、アイテムとかを統合した能力、みたいな

感じかな？」

かなりわかりにくいけど、こんなものだろうか…？

「別の世界…ですか」

「うん。西洋の古風な世界だったり、

ここよりも技術の発展した世界だったり、色んな世界があつて、

そのいくつかの世界にある能力だったり魔法だったりを使える、といったところかな」

「へえ…」

私も行つてみたいですね、そんな世界」

大妖精が感慨深げに言つた。

「まあ、人のいる場所以外は

大概魔物が跋扈してゐるような世界だから

あまりおすすめは出来ないかもしれないけどね…」

苦笑いしながら幻佑がそれに応えた。

「それで、もう一つの能力は…」

まあ、名前の通りかな。

物を増やしたり合体させたり分離したりできるんだ。

まだ試してないけど今のところは自分で作り出した一部の物に適用できる感じかな。」

「それは便利そうですね」

「そうだね。でもこれ、悪用すれば金が増やせるからなあ……」

「あー……それはまずそうですね」

特に霊夢や魔理沙辺りが。

「そこは僕が気をつけなければいいだけなんだけどね。

できるだけ頑張ってみるよ」

「はい、頑張ってくださいね」

「了解。」

そんな会話をしているうちに、目的地が近づいてきた。

「へえー……あれが紅魔館……」

その建物は洋館で、

湖の外れにどん、と建っていた。

そして、使われているレンガは全て赤。

門の鉄柵以外ほとんど真っ赤な館だった。

湖のほとりに降り立った一行。

「とりあえず案内はここまででいいかな。

みんなありがとう！」

礼を言う幻佑。

チルノが、

「じゃあ、また今度なー！」

今度はアタイと弾幕ごっこ、しよーなー！」

元気にそう言った。

「分かった！覚えてたらねー！」

…覚えてないやつのセリフやん。それ。

「では、気をつけて！」

「またなのだー」

「またねー！」

こうして4人は、人里の方へ帰って行った。

「さて…気を引き締めて行くこうか」

幻佑も、紅魔館へ向かって歩き始めた。

その先には一体、何が待ち受けるのだろうか…

2章 紅魔館編

13話 門番

紅魔館へと続いているであろう道を進む幻佑。

「しっかし、本当に真つ赤なこと…」

近づいた所為かより鮮烈な赤に見えてきた。

「内装とかどうなってるんだろう」

見かけによらず普通なのか、それともこんな感じで真つ赤なのか。

「後者だとキツそうだなあ…」

そんなことを呟きながら、幻佑は歩いた。

門前までたどり着くと、一人の女性がいた。

緑が基調のチャイナ服を着ていて、

被っていた人民帽には『龍』の文字が入った星がついていた。

とりあえず、声をかけてみる。

「あの一、すみません」

「……………」

返事がない。無視されてるんだろうか。

「あー、すみませーん」

「……………」

うーん、ただの人間には興味が無いとか、そんな感じなんだろうか。

「あー、すみませーん」

「……………」

……まで来るともう寝てるんじゃないだろうか。

「あーのー、すみませーん」

「zzz……………」

「ほんとに寝てたっ!？」

道理で声をかけても反応がないわけだ。

というか、立ったまま微動だにせず寝るってどんだけ体幹いいんだろう…

しかし、どうしよう…

とりあえず揺すってみたものの無反応。

声を上げてても身動きひとつもしない。

どうしたものかと思っていたら、門の前に張り紙が。

「どれどれ…」

読んでみた。

《門番が寝ている場合はこちらのベルを鳴らして下さい》

「ベル…？あ、これかな」

張り紙のすぐ横にボタンがあった。

「ポチツとな」

躊躇なくボタンを押しした幻佑。

すると、

ヒュッ

と一瞬間がしたかと思うと、

ドスッ 「あ痛っ」

次の瞬間には後ろの女性の頭頂部にナイフが突き刺さっていた。

…ナイフが突き刺さっていた!?

「大丈夫ですか!？」

慌てて女性に駆け寄る幻佑。

「あなた…いえ、いつもの事なのでお気になさらず」

女性の方は目が覚めたのか、頭のナイフを抜きながら受け答えしてくれた。

「いつもの事なのか…」

「こんな日常で大丈夫か…？」

「大丈夫だ、問題ない。」

「なんでわかつたんですか…？」

「幻想郷は古のネタすらも受け入れるのだろうか…」

「それで、どういったご要件で？」

「その女性に訊ねられた。」

「あ、僕は究 幻佑と言います。最近外の世界から幻想郷に来ました。」

「この主のレミリアさんにご挨拶をと思つてやって来ました。」

「いつもの挨拶の後に、要件を伝える幻佑。」

「お嬢様に挨拶…でもあなた、見た感じ普通の人間ですよね？」

「はあ…それがどうかしましたか？」

「それを聞いて女性の目に警戒の色が宿る。」

「貴方はお嬢様が吸血鬼と知つてここへ来ているのですか？」

「ええ、まあ。」

「それをどこで？」

女性の口調が厳しいものになってきた。

…うーん、ヴァンパイアハンターかなんかと

勘違いされてる気がしてきた。

とりあえず誤解を解いておかないと

いけないかな…？

そこで、

「ここに来る前に、霊夢——博麗霊夢に、幻想郷の各所に挨拶回りするならここからでいいんじゃないかみたいなのを言われたので、それでチルノたちに案内して来てもらいました。」

と、霊夢やチルノの名前を出してみた。

「ほう…博麗の巫女が…あと、あの子たちが…」

彼女は少し思案した後、

「分かりました。少し確認を取ってきますね」

そう言っつて、館の中へと入って行った。

「…誤解は解けた、のかなあ…」

少し心配になる幻佑だった。

しばらくして、女性が戻ってきた。

…のはいいんだけど、またナイフが刺さってた。

「……………」

「大体の事情は分かりました。」

あ、そのまま続けるのか…

「分かった…というのとは？」

「咲夜さんがお嬢様からの言付けを頂いていたみたいで、入っても良いらしいですよ。」

「そうですねか…ありがとうございます」

案外平穩に事が進みそうだ…

「ただし」

「…ただし？」

そう言うと、彼女は構えを取って、

「ここを通りたくば、私を倒してから行け！」

キメ顔でそう言った。

「…?!」

えつと…どういうこと？

困惑する幻佑。

「ああ、そういうええばまだ名乗っていませんでしたね。

私は美鈴。紅 美鈴といます。」

「あ、はい…」

ってそうじゃなくて。

「えっと、私を倒してから行け…というのは？」

「そのままの意味です。私と勝負して、勝てばここを通過していいそうです」

その女性——美鈴はそう言った。

「じゃあ、負けたら…？」

「…その時は、お引き取りお願い致します。」

「マジですか…」「マジです。」

となると、負けられないな…

「どうします？引き返すなら今ですよ？」

美鈴はこちらを氣遣ってくれてる。

でも…

「やります。」

覚悟を決めて、言い切った。

「承知しました…つと」

美鈴が大きく跳躍し、間合いを開けた。

「いつでもどうぞ！」

「どうやら、先手はこちらにくれるらしい。」

「しかし、どうしようか」

「姿勢好や体幹の良さなどを見る限り、

美鈴は恐らく格闘技を主体として戦うタイプだと思われる。」

「あいにく空手も合気道もやったことないしなあ…」

「さて、どうしたものか。」

（落ち着け…朝からやってきたことを思い出すんだ…）

「作ったスペルカードの中に、解決策がないか探す幻佑。」

（モンクや空手家の技系統は…ダメだ。）

「アビリティという付け焼き刃じゃあ

あの人には恐らく敵わないだろう。となると…」

「その時、ひとつの策が幻佑の頭をよぎった。」

（そうか、あれなら！）

「でも…こんな方法を使っているのかなあ…」

「まあいいや。物は試しだ！」

そう思い、幻佑が声高らかに宣言した、その策とは――

「英雄召喚V I : 『マツシユ・レネ・ファイガロ』！」

――次元の狭間が、開かれる。

14話 マツシユ・レネ・ファイガロ

幻佑が宣言した瞬間、

『次元のはざま』が出現した。

そして、そこから現れたのは…

「ん……ん……は？」

引き締まった筋肉を持つ身体に、

実は意外と濃い顎髭を剃り上げた、

逞しい顔つき。

紫のタンクトップにアラジンパンツを

身につけた男。

「よ。マツシユ」

マツシユ・レネ・ファイガロ、その人であった。

話は幻佑がスペルカード製作に勤しんでいた時に遡る。

「ふいー……。とりあえず召喚魔法はこんなもんかな？」

召喚魔法のカテゴリ内の魔法をいくつか試した後、一息ついた幻佑。

「そういえば、斬符『超究武神覇斬』を最初のスペカとして使ったはいいものの、技の元の本人にまだ会ったことすらないんだよなあ…」

あの技がなければ幻佑はここはいなかったのかもしれない。
そう考えると、

何故だか無性に「あの人」に会いたくなつた幻佑。

「もしかしたら…呼び出せたりしないかなあ…?」

物は試しである。

幻佑はメニュー画面を漁った。

そして、

「お…これは…」

目当てのものが見つかったようだ。

「よし、早速試してみよう!」

呼び出した人々の名前をアビリティに組み込んで、

発動させる――

「英雄召喚V.I.I.:『クラウド・ストライフ』!」

幻佑がアビリティを発動させると同時に、

何も無い空中にぼっかりと穴が空いた。

少し離れた場所にいた霊夢が目を丸くして、
「は？…それってもしかして…『スキマ』!?」
と叫んだ。

「スキマって？」

幻佑が首を傾げる。が、

「まあいいや。」

それはおいおい説明してもらおうとして…」

そう言つて視線を元に戻すと、ちょうど「彼」が出てくるところだった。

スタツ…

「……は……どこだ？」

そして出てきたのは、チョコボ頭の元ソルジャー。

（おおおおお！キタキター！）

実験大成功。

こうして彼は、クラウド・ストライフ本人を召喚することに成功した。

「…あんた誰だ？」

少年事情説明中

「つまり、俺はあんたの能力で

ここに呼び出された、というわけか？

特に何の用事もなく」

事情説明を終えて、彼も現状を把握してくれたようだ。

「まあ、そうなるね」

「…じゃあ、帰らせてもらおうぞ」

クラウドが素っ気なく言った。

「え？もう帰るの？なんで？」

残念そうな幻佑。

「何故って…依頼のない奴の相手を

いつまでもしている訳にはいかないだろう？」

良くも悪くも仕事人間なクラウドであった。

「ちえーっ…まあ、いいや。」

急に呼び出してすまんかったな」

そして、クラウドは元来た穴へと向かって行った。

「じゃあ、またね」

「ああ。また、かどろかは分からないがな」

そう言つて、彼は元の世界へと歸つていった。

その光景を見ていた霊夢が、ようやく口を開いた。

「…あんた、一体何したの？」

額にはうつすら井桁が浮かんでいる

…ように見えた。

「何…つて言われても、説明しようと思つたら

ちよつと長くなるかなあ…」

「一言で説明しなさい」

さいですか…

「ええつとね…」

別の世界から特定の人物を召喚した、

つてどこかな？」

「召喚…ねえ…？」

なぜか胡散臭い目を向けてくる霊夢。

「…なんでそんな疑わしげなの？」

「……………一人、いるのよ。」

あんたがさつきやって見せたみたいに

自分やあらゆる物を『スキマ』を

介して中に行き来させることが出来る奴が。」

「へえ、すごい能力だね…それ」

それを聞いて幻佑は感嘆した。が、そのあとの霊夢の言葉で幻想郷に来て最大級の驚愕を覚えることになる。

「そいつの名は八雲紫。」

『境界を操る程度の能力』をもつ妖怪で、

この幻想郷を作った奴らの内の1人よ。」

「え？ いやいやちよつと待ってくれ、幻想郷を作った張本人!? 物凄い重鎮じゃないのそれ…というかなんで霊夢がそんなこと知ってるの…?」

混乱のあまりせわしなく動揺や疑問が溢れ出す幻佑。

「…知り合いなのよ。というか、博麗の巫女自体あいつが幻想郷そのものの維持のために作り出したものだし。」

霊夢が何故か心底気怠げな顔をして言った。

「えええ…思考が追いついていかない…」

幻佑は考えることを半ば放棄しつつあった。

「そんなに難しく考えなくてもいいわよ。」

アレは何考えてるか全く掴めないし、

普段はのらりくらりとした奴だし冬眠もするし…

「この幻想郷でも指折りの変人よ。」

「…いいの、そんなこと言って…」

「大丈夫よ。」

聞かれてたつてあいつは気にかけてやしないわ」

それでいいのかなあ…

その後、今後呼び出す機会がありそうな人には

何人が声をかけておいた。

というか、シリーズごとのメインキャラ

ほぼ全員呼び出した。

幸いにも揉めるようなことはなかったのは良かった。と思いたい。

「…紫に後でなんか言われそうね」

霊夢が小声でなにか言ったが、よく聞こえなかった。うん、何も聞いてない。

余談だが、1部ボスやラスボス陣営の人々

(エクステスとかケフカとか) は呼び出せなかった。

そりゃ当たり前かとも思ったが、意外なことにセフィロスは呼び出せたとし、初日にオメガも呼び出せていた。

(ボーダーラインはなんなんだろうか…?)

そして現在に戻る。

「おー、幻佑か。早速俺の出番か?」

マッシュが聞いてきた。

「ああ。そんなところだ。」

そう言つて幻佑は目の前の光景を見て

目を丸くしている美鈴の方を指さし、

「あの人と戦つて欲しい」

と言つた。

「え? それ本気で言つてるのか?」

「うん。あいにく僕には格闘技の心得がないから」

情けないことを言うんじゃない、幻佑…

「…成程ね。分かった。でもなあ…」

了解はしてくれたが、

すぐに気難しい顔になったマツシユ。

「でも？」

「…いくら腕が立つ人でも、女性だとなあ…」

「あー…」

このマツシユ、見てくれは筋骨隆々で熊みたいな男だが、

中身は心優しいナイスガイかつ紳士なのだ。

（余談だが彼の兄はナンパ性の国王である。）

「だけど、同じ格闘家として

そんな気遣いはむしろ失礼かもな」

そう言つて、マツシユは美鈴の方へと向き直つた。

「話は纏まりましたか？」

「ああ。

幻佑に代わつて俺があんたの相手をするぜ」

お互いが向き合う。

二人の間を、風が吹き抜けた。

「がんばれー、マッシュユー」

自分は見てるだけなのでお気楽な幻佑。

「合図、どうする?」

「そうですね…」

幻佑のことは気にしない事にしたらしい。

「では、こうしましょう」

美鈴はそう言つて、

さつき自分に刺さっていたナイフを取り出した。

「このナイフが落ちてきたら始めましょうか」

そして、それを結構な勢いをつけて上に放り投げた。

「…しばらく戻って来ないんじゃないか?」

マッシュユーが問いかける。

「そうかもしれないですね。」

では今のうちに心の準備でもしておいて下さい」

美鈴が僅かに挑発の色を含んだ言葉を返した。

「…ああ。是非ともそうさせてもらうぜ。」

「そういえば、まだ名乗ってませんでしたね」

美鈴が言った。

「おつ、そういやそうだったな。」

俺はマツシユだ。マツシユ・レネ・ファイガロ。

よろしくな！」

そう言いながら、マツシユは腰を浅く落として両腕を前に構えた。

「いい、名前ですね。私は紅　美鈴。」

レミリアお嬢様に仕える、ただ一人の門番です」

美鈴も返しつつ、腰を深く落として半身を後ろに引いて構えた。

辺りが静まり返り——

ザクツ

——二人のちょうど真ん中に、ナイフが落ちた。

戦いの火蓋が、切って落とされた。

15話 格闘家と格闘家

まず駆け出したのはマツシユだった。

鍛え上げた脚力をフル活用して

一瞬で美鈴の前へとたどり着き、

「先手必勝！」

その勢いを殺さぬまま右腕を振り抜いた。

もちろん、美鈴も

指をくわえて待つていた訳ではなく、

「ふっ！」

構えの姿勢から一瞬で右脚を振り上げ、

マツシユの拳に合わせた。

バシッ、という肉を打つ音が辺りに響く。

「やるな……！」

「そちらっ！そ……っ！」

美鈴が右脚で払い除け、返す拳をマツシユが左腕で受け止める。

だが、受けきれないと判断したのか途中で受け流した。

そのままお互いに距離を取る。

「っ痛う…なんちゆうパワーだ」

マツシユが左腕を軽く振った。

「…ただの人間に、

生身で攻撃を受けられたのは初めてですよ」

「へへ…そいつぁーどうも…つとー」

マツシユは再び美鈴に突撃していった。

（今の攻撃、普通の女の人には出せる威力じゃあなかったな…

一体どんな鍛錬をしたらあんなに練度の高い拳が出せるんだ…？）

マツシユは、美鈴の蹴り上げを上体を逸らして躲しつつ、考えていた。

先程受けたパンチは、自分があと少し気を抜いていたら

受けきれずに左腕に少なくないダメージを貰っていたであろう、重い一撃だった。

（とにかく、一撃一撃に集中しよう…

意識して受ければ負傷することはないはずだ）

そう冷静に判断しつつも、マツシユの心は不思議と高揚していた。

(それにしても、幻佑に呼ばれて来て良かったな。

対人格闘でここまで強い相手は師匠やバルガス以外に今までにいなかったし…

もしも聞く機会があったら、どんな鍛錬してるのか聞いてみたいぜ)

そんなことを思いながら、意識を目の前に切り替えた。

(この男…本当に人間なのでしょうか？

今まで戦ってきた人間の格闘家の中で一、二を争う程、力強く、とても洗練された動きをしている…

さっきの拳撃も本気ではなかったとはいえ、

普通の人間が受けるにはかなり厳しい威力だったはずなのだけれど…

むしろこちらが気を抜いたら、難なく拳が跳ね除けられそうですね…)

一方美鈴も、躲された蹴り上げを踵落としへと派生させつつ、感心していた。

それも躲されるのを見て、

(早くも動きが見切られつつある…？

成程、これは久しぶりに楽しい闘いが出来そうですね！)

高揚感に意識を浮かせていた。

(それにしても、一体どんな鍛錬をしたらこんな動きができるんでしょうか…)

この後機会があれば聞いてみたいものですね)

そして、マツシユと同じようなことを考えてながら、追撃を繰り出して行つた。

「すごい…どうなつてるんだあれ…」

戦いを離れた場所で見えていた幻佑は、

2人の人間離れた動きにただただ脱帽していた。

自分のようなアビリティに頼りきつた動きではなく、

長年積み重ねた鍛錬によって生み出される

精巧緻密な完成された動作。

そのぶつかり合いは、さながら二人舞のようであつた。

「あんな動きが…できるよになれたらなあ…」

羨ましさ半分、興味半分で、幻佑は二人の戦いを観劇していた。

ドゴツ！バシツ！ガツツ！

といった生々しい音を響かせながら、

十合、二十合、三十合…と、互いの拳を、脚を、

交わしてゆく。

何度もの交差の後、お互い飛び退き、間合いを取った。

「流石、と言うべきか？」

まあ、まだ本気じゃあないんだらうけれどもな」

マツシュが美鈴に問う。

「そちらこそ、並大抵の人間より素晴らしい

動きをしていますよ。

それに、全力でないのは貴方もでしょうか？」

美鈴が問い返す。

「そうかも……な？」

それに対してマツシュはニツ、と歯を見せて笑いながら言った。

「……いいでしょう。あなたに敬意を表して、

ここからは全力で行かせて頂きましょう！」

そう言い、美鈴が呼吸を切りかえる。

「スウウウウウ……コオオオオオオオ……」

そして――

「ハッ！」

美鈴の全身を、力の奔流が走り抜けた。

「あれは……？」

幻佑は目の前で起きた美鈴の変化に、ただただ驚いていた。

「……気功術か！」

マツシユはそのタネに気がついたようだ。

「御明答。私の能力は『気を使う程度の能力』。

もとより気功術は、私の得意分野です」

気功術。中国において、『気』を用いて怪我や病気の治療などを行う、伝統深い技能。

『気』の扱い方次第では、敵の奥深くへとより大きいダメージを与えることも可能らしい。

美鈴はそれを用いて、己の身体能力を引き上げたのである。

それを見たマツシユはというと……

「まさか……で、お目にかかれるとは……」

へへへつ、俄然やる気が出てきたぜ！」

やる気に満ち満ちていた。

そんなマツシユを見て、

「おや、何もしなくていいのですか？」

「見ているだけだったのが意外だったのかそう声を上げた。
「ああ。まだ大丈夫だぜ」

彼にも何やら手はあるようだが、まだ余裕を見せている。

「そうですか…では、行きます！」

言い終わると同時に――

美鈴がマツシユの前に出現する。

「なっ…!?!」

動揺するマツシユ。

美鈴は、その隙を見逃さなかった。

「ハアアッ！」

ドゴオツ…!」

マツシユが殴られたと気づいたのは、

数メートル吹き飛ばされた後であった。

「ぐうっ…ツツ！」

何とか体勢を立て直し、着地した。

「ゲホゲホッ…っ痛え」

殴られた腹のあたりを抑えて蹲るマツシユ。

咄嗟のことで防御は間に合わなかったが、

無意識のうちに後ろに体をずらしていたため

内臓への深刻なダメージは避けられた。

(だが、かなり体力が削られた感覚があるな…)

直接攻撃とはまた別に体力を持っていかれたような…)

パンチ一発でここまで体力が削られるのは妙だ。

刹那の思考の後、

マッシュは一つの結論にたどり着いた。

(もしかすると、『気を使う程度の能力』、か?)

己の気を流し込むことで相手の体力を消耗させているのかもしれない。

(だとすると、近接格闘とこれ程噛み合った能力つてのは恐ろしいもんだぜ…)

そんな胸の内を知ってか知らずか、美鈴が、

「やはり流石ですね。

腹に風穴が空くかどうかギリギリの力で打ったつもりだったのですが」と言った。

それを聞いたマッシュの顔が青くなる。

「おいおい…それは大丈夫なのか…?」

「貴方なら大丈夫かと思ひまして」

「買い被りが過ぎるぜ……」

「スペルカードルールのにも大丈夫じゃない気がするのだが、そこは目を瞑ろう。まだこれは普通の拳ですが、」

「これに弾幕を上乗せすることもできますよ」

美鈴が少し自慢気に付け足した。

「そいつあすげえな……よし。」

俺もやられっぱなしじゃあ居られねえな。

「いつちよアレやるか！」

美鈴の本気が、マツシユの闘志の炎を滾らせた。

腕をクロスさせ、声高らかに宣言する。

「行くぜ！『爆裂拳』！」

次の瞬間、

「!!!」

美鈴の視界は、無数の拳に覆い尽くされた。

16話 全身全霊

16話

爆裂拳——

コマンド『ひっさつわざ』にて↑↓↑Aの順番でコマンドを入力することで発動する技『ばくれつけん』。

敵単体に防御力無視の必中攻撃を行え、序盤から活躍する技のひとつである。

「なっ……くっ……」

美鈴は、先程までとは明らかに違う速度で自分へと襲いかかる拳の嵐をなんとか捌き続けていた。

先程までであった余裕はとうに消え去っていた。

(まだこんな手を隠していたなんて……)

そして、

「オオオオオオオオオオオオッ！」

マッシュユが叫ぶと同時にさらに拳の速度が加速する。

(不味い…捌ききれない…っ！)

ついに美鈴へ一撃が入る。

ドガツ、という鈍い音と共に、その拳が美鈴に突き刺さった。

「がふっ…」

(なんて…重い一撃…)

だが、そこで攻撃が止むことはなかった。

次から次へと、彼女へと容赦ない攻撃が入り続ける。

「ハアアアアアッ！」

ドツツ…!!

最後の一撃で、美鈴を吹き飛ばし返した。

そのまま、門へと勢いよく激突する。

ドゴオツツツ！

「がはっ…!!」

その一撃は、レンガ造りの門に彼女の

身体がめり込むほどの威力だった。

「しまった……やり過ぎたか……？」

熱中するあまり力加減が上手くいかなかったのか、マツシュが焦っている。

「大丈夫か!？」

マツシュが慌てて駆け寄ろうとしたが、

「大丈夫です……よ……っ！」

その前に美鈴が答えた。

自力で体を下ろし、構え直した。

ふらつきは残っているようだが、

その瞳にはまだ闘争心が漲っていた。

再度、お互いが向き合う。

(あれだけの拳撃を叩き込んだのに、まるで倒れる気配がない……)

一筋縄じゃあ行かないって訳か。

ばくれつけん以外にも必殺技はあるのだが、

この状況では恐らく一つを除いて

決定打にはなりえないだろう。

そのひとつも、

「やっぱりただもんじゃねえな、あんた」

「その言葉、そっくりそのままお返ししますよ」

軽口を叩き合う2人。

しばし睨み合った後、

「次で最後にしましょうか……」

「そうだな……」

そう言って、

2人は最後の太技に向けて力を全開にする。

「ハアアアア……」

互いが異なる力をを纏った。

そのまま2人が目にも止まらぬ速度で駆け出す。

「行くぞオオツ！ 『タイガー……』」

マツシユが脚に宿すは、猛虎の気魄。

「行きますッッ！気符『地龍…』」

対する美鈴が脚に纏うは、龍神の気魄。

その人間離れした脚力をもつて、美鈴が飛ぶ。

美鈴が上で、マツシユが下。

天高くから急降下する美鈴を、マツシユが迎え撃つ。

そして――

「ブレイク』ッッッ!!」

「天龍脚』!!」

一閃。

交錯。

二人が地面に降り立った。

静寂が辺りを包み込む…。

「……お見事、です」

そう言つてバタリとその場に倒れ込んだのは、

美鈴だった。

「ハア……ハア……紙一重……だったぜ……ぐっ」

マツシユの方も無事……とはいえなかったようで、

その場に膝をつく。

『タイガーファンク』が出るほどピンチだったようだ。

「大丈夫？」

今まで空気を読んで手出しをしなかった幻佑がマツシユの元へ向かった。

「ああ……大丈夫だ。」

俺よりも美鈴……さんの方は大丈夫か？」

自分のことよりさつきまで殺し合いに近い戦闘をしていた相手のことを気にかける

マツシユ。

確かにすぐ起き上がって来ないのは

少し心配である。

「さあ……とにかく行つてみよう」

2人は、美鈴の様子を見に彼女へ駆け寄った。

「ううん…あと5分…」

「…大丈夫そうだね」

「そうだな…」

「この後のことなんだけど…どうしよつか」

「そうだなあ…美鈴さん寝たままここに放置っていうのも」

「それじゃあ、気をつけて行ってこいよ」

「うん、十分気をつける。」

そう言って、幻佑は紅魔館の中へと入っていった……

17話 紅魔館のメイド

「はえー…物凄い広さだなあ…」

というか、内装がここまで赤いとは思ってなかった」

意気揚々と紅魔館の中へ入った幻佑だったが、

その広さと、赤さにただただ圧倒されていた。

「吸血鬼の館ってだけはあるのかな」

エントランスを奥へ進もうとした時、

「ようこそ、紅魔館へ」

前触れもなくいきなり幻佑の目の前に

銀髪のメイド服の女性が現れた。

「！」

突然のことに驚きを隠せない幻佑。

「失礼しました。私は十六夜咲夜。」

レミリア様に仕えるメイド長でございます」
メイド長——十六夜咲夜が自己紹介をした。

「あつ、僕は……」

幻佑も自己紹介をしようとしたが、

「究 幻佑様ですね？」

先回りされた。

「え？なぜ僕の名前を……」

再び驚く幻佑。

咲夜が続ける。

「お嬢様——レミリア様の能力です。

今日貴方がここへ来ることも、お嬢様は予見しておられました」

「予見……？未来視の能力かな……？」

「いいえ。お嬢様の能力は『運命を操る程度の能力』です。

お嬢様は今日貴方がここへ来訪してることが運命だと予見しておりました。」

幻佑の独り言に、咲夜が答える。

「(ここ)に来ることが……『運命』だった……？」

にわかには信じ難いけど……ここは幻想郷だし、

こんな能力が存在してもおかしくは無い…のかな？」

「それで、いきなりで申し訳ないのですが、

ひとつ、お願いしたいことがあるのです…」

ふいに咲夜が聞いてきた。

「問題ないですけど…一体何ですか？」

幻佑が答えると、咲夜はこちらを見据えて、

「私と手合わせしていただけませんか？」

と言った。

「…はい？」

たつぷり10秒は黙ってから、

幻佑はそれだけ答えた。

「ですから、私と勝負して頂きたいのです」

「なぜ…？」

首を傾げる幻佑。

「先程の戦闘であなた自身が戦っていらっしやらなかったのです、

まだお嬢様に会わせて良いのかどうか判断しかねているのです。」

その言葉に幻佑はしばし考え込む。
そして理由らしきものを思いついた。

「…吸血鬼ハンター、ですか」

幻想郷に来ているとはいえ、

その手の人間が幻想入りしていないとは限らない。

「それもありますね」

「それ〴〵…他にもなにかあるんですか？」

という幻佑の質問の答えは、

「いえ…私個人が、

あなたと戦ってみたいと思っただけです

あれだけ強力な戦士を使役するあなたの強さは

一体どれほどなのか、と」

「……………さいですか」

予想してたものとややズレた返答が

返ってきて拍子抜けした幻佑。

（マツシユは使役してる訳じゃあないんだけど…まあ、あの門番—美鈴さんを倒したマツシユは確かに強いと思われるだろうし。）

『マツシユが強いだけで自分が強い』と思われるのは正直なところ不本意である。

(というかそもそも、完全に自力で戦ったのって、凜子の時だけだった気がする…)

前回は完全にマツシユに任せていたし、

魔理沙の時はL A (ラストアタック) はオメガにやってもらったので、

ここら辺で最初から最後まで1度自力で

戦っておかないと経験にならなくてヤバそうである。

(覚悟を決めよう)

そう、決心した。

「それで、お受けしていただけますか？」

NOと答えられても、一応お目通しはさせて頂けませんが」

咲夜からの問いに、幻佑はキッパリと、こう答えた。

「もちろん、答えはYesです。」

その答えに、咲夜は微笑を浮かべ、

「ありがとうございます。」

では、準備をしていてください」

そう言つて、次の瞬間居なくなつた。

「…どういう原理なんだ？」

咲夜が何らかの能力を持っていることは確実だろう。

恐らくこの館で唯一の『人間』で、メイド長を任されているような人物が『能力なし』とは到底思えない。

(考えられるのは瞬間移動する程度の能力、

と言つた感じの能力だけど、それは恐らく違うと思う。)

咲夜の能力について幻佑は何か感じ取つたようだ。

(まだ分からないけど、とにかく対策は万全にしておこう)

そう考え、幻佑は準備を始めた。

数分後、咲夜が戻つてきた。

「準備は整いましたか？」

そう聞いてくる彼女の手には、

数本のナイフが挟まっていた。

幻佑は、そのナイフに既視感を感じた。

「そのナイフは…」

「?…ああ、これですか。」

何故吸血鬼のメイドが銀製のナイフを持っているか不思議に思われるかもしれませんが、

諸事情あつてお嬢様から携帯を許されているのです」

「へえー…」

つて、そうじゃなくて。

「そのナイフ、どこかで見たようになって

思ったんですけど、美鈴さんの頭に突き刺さってたのと同じナイフですね…」

気になっていた既視感の正体がわかった。

となると、さつき美鈴にナイフを突き刺したのはこの人で間違いないだろう。

「ええ、そうですね。その際は

こちらの門番がご迷惑をおかけしました…」

そう言つてこちらに向かつて一礼する咲夜。

「いえいえ、大丈夫ですよ…」

…もしかして、いつもああなんですか？」

幻佑が聞くと、

「ええ…そうですね…」

彼女は何かをこらえるような表情で言った。

「…大変ですね」

「それでは、始めましょうか」

咲夜のその言葉を聞いて、

改めて緊張感が張り詰めてきた幻佑。

「よろしくお願いします」

そう返し、幻佑もあるナイフを出して構えた。

「あなたもナイフを？」

「いえ、下手にデカイ武器出しても持て余しそうなので、

まずはナイフから使い慣らしていこうと思っただけです。」

咲夜の主要武器がナイフだったのは正直想定外だったのだけれど。

咲夜は、目を細めて

「成程…ではそちらからどうぞ」

とだけ言った。

(いかにもナイフの扱いが簡単であるかのような言い方しちゃったよ…)

でもなんでだろうか…

初めてナイフを持った感覚がしない、っていうのは)

こちらに来る前は一体何をしていたのだろうか、と考えると少し背筋が寒くなるが、今は目の前の敵に集中することにした。

「フウウ——」

深呼吸。

「行きます—！」

幻佑は咲夜へと——

「幻符『殺人ドール』」

駆け出した—のだが、

「……!!?」

急に幻佑の前方に大量のナイフが展開した。

そのまま幻佑へ向かって

突如の事で動揺する幻佑だったが、

「なん…のっ!」

体をひねり、走り出そうとした勢いを利用してコマのように回転した。

ガガガガガガキン!

複数のナイフを叩き落としたが、

「くっ…数が多すぎる…!」

まだ無数のナイフが迫ってくる。

幻佑は、スペカを1枚、取り出した。

「弾幕には…弾幕をつ!」

そして宣言する。

「てきのわざ『マトラマジック』!」

周囲に無数のミサイルが展開し、

ナイフへ向かって飛んでゆく。

ドドドオン…

「よし、ほとんど落とせた」

それでも抜けてくるナイフはあったが、数本程度なので落とすことが出来た。

(そうだ。ちよつと貫っておこう)

落としたナイフを数本回収する幻佑。

「避けることに専念するかと思つていましたが、まさか全て撃ち落とされるとは…

少々驚きました」

そう呟く咲夜は、

今立っている位置から1歩も動いていない。

「それはどうも…」

(ナイフが急に現れたってことは、

少なくとも瞬間移動やPKの類の能力じゃないってことは確かかな)

バックステップで後退しつつ、熟考する幻佑。

(後考えられるのは、咲夜さんがものすごい速さで動いて大量のナイフをばらまいているか、このエントランスにナイフが大量に仕込まれているか——)

そこまで考えて、幻佑は何か引っかけかきを感じた。

「ん…？速さ？」

「どうかしましたか？」

考えが声に出ていたようだ。

「いえ、あなたの能力について何かをつかみかけたんですが…」

幻佑がそう言うのと、咲夜は目を少し見開き、

「もう看破されかけているとは…」

流石、と言うべきですか」

と言った。

「こちらもお出し惜しみをしている場合ではないですね」

そして、片手に何本ものナイフを構えて、

もう片方の手に持つスペルカードを宣言する。

「幻在『クロックコープス』」

幻佑はその宣言を聞き逃さなかった。

(クロック…時計…つてことはまさか…)

考える暇もなく、

またも突然にナイフが飛来する。

さつきよりナイフの数は少ない。

しかし、今度は判別のしづらい小さな弾が織り交ぜられている。

「小型弾まで…!」

慌てて幻佑は上方向へ飛び上がる。
しかし、これは悪手だった……

18話 時

飛び上がった直後、幻佑はその判断を後悔した。

(しまった！弾幕戦闘中に空中戦は不味い……！)

地上なら地面があるので反射する弾や地中を透過するような弾がない限り基本的に相手の後ろや地中に弾幕を張ることは不可能だが、

空中なら話は別である。

ましてや自分が地上にいるなら尚更好都合。

焦る幻佑の様子を見て、

咲夜がニヤリと笑った気がした。

次の瞬間、幻佑の四方八方をナイフと弾幕が囲う。

「チエックメイト、ですわ」

全方位からナイフと弾幕が迫る。

「畜生っ……！」

幻佑はやむ無く、ナイフを増殖して投擲し、迎え撃つ。

が、それだけでは焼け石に水。

抜けてきたナイフに対応出来ず、何本か被弾してしまう。

「くっ……」

そのまま墜落してしまった。

相当な痛みを覚悟した幻佑だが、

「っ……痛……くない……？」

訪れるであろう痛みは、起きなかつた。

その代わり、ナイフが刺さった場所に妙な違和感を感じる。

幻佑はこの現象に心当たりがあつた。

それは博麗神社で魔理沙と戦つた時、マスタースパークの直撃に遭つた足が動かなくなつた時のことだ。

当時は魔理沙に手加減されてたのかなと思つただけけれど、

今考えてみたらあれは生身の人間に直撃したら火傷じや済まなさそうだった。

気になってHPを確認してみたら、ほんの少し削れていた。

（つまり……一定の負傷はHPが肩代わりしてくれるって事？

しかも回復手段もあるし……）

だとしたら、HPアップが生命線になりそうだ。

更に、あのナイフを使えば…

幻佑は立ち上がり、ナイフを引き抜く。

血は——流れない。

刺さっていた場所に来た刺し跡も、徐々に塞がっていく。

その光景を見て、咲夜が驚愕する。

「貴方…!?!」

幻佑は咲夜の方を向いて、

「そういう能力体質みたいです」

と苦笑した。

「それと、あなたの能力について、多分見当がつかしました」

幻佑は追い討ちをかけるように言う。

「今それを言いますか…」

先程の衝撃的光景が忘れられないのだろうか、

咲夜が苦い表情で返す。

「一応聞かせて頂きましょうか」

「…あくまで上からなんですネ」

そして幻佑は咲夜の方を見据え、言い放つ。

「あなたの能力は…『時間を操る程度の能力』ですね？」

「……………」

驚きました…

まさか能力名を丸ごと当てられるとは…

貴方、本当に何者ですか？」

口元に手を当てて驚く咲夜。

「普通の人間じゃないことだけは確かです…

それと、能力名は予想でしか無かったですけどね」

苦笑いする幻佑。

「というか、わかったところで対策はほぼ無いんですけどね」

そうなのである。

実際問題、普通に時間停止に対抗する手段は、止められる前にやる、くらいしかないのだ。

もちろん、そんなこともほぼ不可能に近いわけで…

「わかったとか大見得切ったのはいいんですけど、何も現状の打破にはなっていないですよね……」

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙が流れる。

無言で咲夜がナイフを構えた。

「……………変化型『エターナルミーク』」

そして宣言する。

今度は弾幕のみが飛んできた。

先程までのナイフ弾幕よりはいくらか速度が落としてあるようだ。

(……これだけならいくらでも避けられ……)

? とか思っていたら、途中で弾の半分がナイフへと変化した。

「うわわっ」

しかもナイフと弾幕のスピードが異なるので、避けにくいことこの上ない。

(うひひ……これは厄介だ)

それでも幻佑は掠りながらも回避し続ける。

掠るたびに何か得点が貰えてる気がするのは気のせいだろうか。

「遠くから投擲したナイフじゃ致命傷を与えるのは厳しいわね…」

そう言つて、咲夜が新たなスペルカードを使用せんとする。

(不味い…また止められる！)

幻佑は全速力で駆け出そうとした――

「これで終わりにしましょう。」

『咲夜の世界』

幻佑の判断も虚しく、幻佑の体が咲夜の5m手前で静止する。

止まった時の中で、咲夜が動き出す。

「いくら負傷を無視できたとしても――

致命傷となる攻撃を与えれば動きは止められるはず…！」

咲夜が呟き、幻佑の周囲、

とりわけ人間にとって致命傷となりうる場所を狙える位置を特に重点的にナイフを展開する。

「そして時は――」

再び時間を動かそうとしたその時――

「あああああああッ！」

「なっ……!!?」

幻佑が突然叫び出したかと思うと、

周りに浮いていたナイフを吹き飛ばした。

「え……?」

咲夜は呆然として、

そのまま時間停止を解除してしまった。

「ハア……ハア……動けた……」

余程消耗したのか、肩で息をする幻佑。

「貴方……何を?」

咲夜が問う。

「『ストップ防御』と……『ヘイスト』の……応用です……ふう……」

そう。幻佑が咲夜の時間停止を打ち破ったのに利用したのは、状態異常防御のアビリティ『ストップ防御』と、白魔法『ヘイスト』である。

幻佑は当初『クイック』と同系統の時間停止にはストップ防御やヘイストによる上書き効果は効果を為さないと想着って忘れ去っていたが、

土壇場のダメ元で両方使ってみたら一瞬ながら抵抗することができた。

「停止した時間に干渉するために集中をしすぎてしまつて、ものすごく疲れましたけど」

ね……」

「さて、そろそろこの戦いも終わらせましょう」

「終わらせる……？」

時間停止に対する対策は思いついてないのに、どうしようというのです？」

咲夜が疑わしいというように言ってきたので、

幻佑は、

「誰にでもできる対策なんて大層なものじゃありませんけどね」

と言つて、持っていたナイフとはまた別の、刀身の青いナイフを生み出した。「ナイフ

拾つていて良かった」

そして……

「ふうふうう——フンツ！」

ザシュツ！

自分の腹に突き刺した。

「は……え……？」

咲夜が呆気にとられた表情になる。

「つつつ——はあ……ふう。」

痛みが軽減されてても…結構堪えるなあ…これ…
顔を顰める幻佑だったが、咲夜の方を見て、

「これは時間停止対策とは関係ないんですが——

このナイフの性能を、できるだけ引き出すために必要な行動でした」

幻佑がこのような行為に及んだ理由は、

いま幻佑が用いているナイフが、

あの『バリエーションナイフ』だからである。

その特性は、「HPが減少するほど攻撃力が上昇する」というもの。

そのため、敵の攻撃を受けるよりはる程度安全にダメージを稼ぐためにわざわざ自傷行為に及んだのであった。

「ただ、このナイフの性能を見誤ってましたね…

おかげでHPが残り2割ですよ」

さすが悪名高いモグタ…もとい、バリエーションナイフ。

一刺ししただけでHPが瀕死ラインである。

幻佑が防具を装備していなかったというのもあるが、そもそも防具の防御力はほぼ無視されるので意味はなかったか。

「本命は…これです！」

そしてその一手を発動させる。

『タイムトリップ』

——咲夜は自分の体に異変が起きたことを感じ取った。

「な……？体の動きが鈍く……？」

体を動かかそうとするのだが、ピクリとも動かない。

「いや、違う……動きが鈍いのではない……」

動けない……ですって？」

その事実が咲夜の動揺を誘う。

幻佑が、咲夜へ歩み寄る。

「僕が時を止めました」

「……!!」

咲夜は動けない。

『タイムトリップ』は10秒だけ時を止めることが出来るアビリティ。

その時の止め方は少々特殊でして、

たとえ相手が停止耐性を持っていても動きを止めることができます。

たった10秒。されど10秒です。」

幻佑はナイフを構え、

「この状況でなら…」

貴方を行動不能にするには10秒で十分です！」

声高らかに宣言する。

「『ミラーージュダイブ：連』！」

その技は、マツシユの仲間のロックの瀕死必殺技。

『たたかう』を選択した時、HPが一定値以下の場合に低確率で出る技で、某ひたすら楽したい人はボス戦でこれが出るまでリセットしたとか。

幻影のごとき剣閃が、咲夜を襲う。

「…!!」

だが、それが咲夜を直接傷つけることはない。

その代わり、咲夜の周囲に斬撃の軌跡が重なってゆく。

「残り…3秒！」

幻佑は息を切らしながら、次々と攻撃を繰り返す。

咲夜は時が動き出した時の対処を全力で考えるも、四方八方を斬撃に囲まれ、抜け出す穴を見つけないことが出来ない。

そして、

「ハア……ハア……10秒経過！時よ、再始動せよ！」

ついに、時は動き出した——

——と同時に、咲夜によって再び時が止められた。

「つつつ——ハア……ハア……」

咲夜はその場に崩れ落ちたい衝動に駆られたが、

少し動いただけでも斬撃が触れそうな位置まで迫っていた。

「諦めるしかないわね——」

そう言つて、咲夜は時間停止を解除した。

途端に、止まっていた斬撃が動きだし、咲夜を切り刻む——

「回避『テレポスワップ』」

直前に、その場から咲夜の姿が消え、数メートル先に現れた。

斬撃が何も無い空間で炸裂する。

「……え？」

何が起こったのか分からず、困惑する咲夜。

幻佑は、腕を下ろし、

「相手を殺すのは…ルール違反なので…」

そう言ってその場に倒れ込んだ。

「流石に…疲労が…限界…」

仰向けのまま、胸を上下させて息をする幻佑。

「この勝負…僕の勝ちで、いいですか？」

咲夜は逡巡する表情を見せたものの、

「……ええ、認めるわ」と言ってくれた。

「良かった…のかな？…よいしょ。」

それで、僕について何か分かりましたか？」

幻佑は呼吸を整えて起き上がりつつ、咲夜に訊ねる。

咲夜は一瞬キョトンとした顔になったが、

「…貴方が面白い人間だったことは分かりましたわ」

そう言って、微笑んだ。

「それでは、お嬢様のところへご案内致し——」

咲夜がそこまで言ったところで——

ドツカアアアン……

どこか遠くから、爆発音が聞こえてきた。

「な、何事ですか!？」

慌てる幻佑だったが、

次の瞬間咲夜の方を見て絶句した。

「……あの サ ボ リ 魔 ツ ツ ツ……!!」

咲夜は満面の笑みを浮かべているように見えて、完全に目が笑ってない。

(怒りが頂点を通り越した時の笑みになっちゃってる…)

「大変申し訳ございません。

少々用事ができてしまいましたので、

しばらくの間ここでお待ち頂いてよろしいでしょうか？」

その笑顔を向けてこちらへ問いかけてきた。

「えっと、はい」

凄まれたような気分になり、

思わずそう答えてしまう幻佑。

「分かりました。すぐ戻りますので」

そしてそのまま一瞬でどこかへ行ってしまった。

数秒惚けていた幻佑だったが

「…流れで待つって言っちゃったけど、

やっぱり心配になってきた」

幻佑はどうしようかそのまま数秒思索した。

結果、

「よし、行ってみよう」

そう言つて幻佑も、音が聞こえた方角へ走り出

「おっと、迷子になりそうで怖いな…」したと共に急ブレーキをかけた。

確かにエントランスだけでテニスできそうな位広いので、他の通路や各部屋もかなりの広さになるだろう。

「館内の見取り図みたいなのがあればいいんだけど」

当たりを見回してみても、そんな感じのものは見当たらない。

「咲夜さんが全部案内してくれるから必要ない、つてことかな…」

仕方なく、幻佑は闇雲に探そうかと考えたところで…

「うん…う…見取り図…地図…あ！」

突如閃いた。

「『魔法の白地図』があるじゃん」

魔法の白地図とは——

DS版FF4で追加された、いわゆるオートマップピンク機能である。

各フロアを歩いていくと、白い部分が埋まっていき、到達率が100%になるとアイテムが貰える、といった代物だ。

手に入るアイテムはトレジャーハントを除けば全て消費アイテムだが、ゲーム内において戦闘を行わずにラストエリクサーを手に入れられる唯一の手段だったりする。

「どんな仕様になってるかわかんないのが不安だけど、物は試しだ」
早速幻佑は、魔法の白地図を作り出してみた。

すると、

「おっ、きたきた」

自分の立っている場所を中心に、だいたい円形の赤が現れた。

「流石に%表示は…ないよね」

むしろ貰えたらどうしようかと不安になっていたところだ。

「ん…これは？」

何やら矢印マークが地図の右上の方向にあり、地図の外を指していた。

「これは…Xのイベント矢印？」

もしかして、色んな地図のハイブリット仕様だったりするのか…？」

ワールドマップの利便性が一気に増しそうである。

「とにかく向かってみよう」

幻佑は矢印の方向へ向かって歩き出した。

19話 魔法少女達

「……かな？」

矢印が指す方向に進んで、大きな扉の前までたどり着いた。

扉の横にはすごく達筆な字で『Library』と書かれていた。

「……は図書館か……」

中から何やら爆発音や、どこかで聞いたような弾幕の音が聞こえて来る。

「よし……入るか」

幻佑は、扉を開けた。

ドドドドドド……

2人の魔法使いが、弾幕を撃ち合いながら本棚と本棚の間を飛び交う。

「いい加減諦めたらどうだ？パチュリー」

パチュリーと呼ばれた

紫色のパジャマのような服を着た魔女は、

「それは……こつちの……セリフよ……」

息を切らしながら応える。

「今日という今日は……あなたが盗んだ本、きつちり返してもらおうわよ……魔理沙！」
相手をしている魔法使い——霧雨魔理沙は、

「返すつもりはないぜ——死ぬまでな！」

満面の笑みで、言い返した。

「お邪魔しまーす……っと……広っ」

図書館の内部は驚くほどの広さだった。

おびただし数の本棚にびつちりと隙間なく本が詰まっていた。

ドドゥーン——

「爆心地はあつちか」

幻佑は音の聞こえた方へと向かう。

「いいのか？小悪魔の心配はしてやらなくて」

魔理沙が本の山を指さして言う。

そこからは腕が1本、突き出していた。

「うるさいわね！後でいいわよっ！」

パチュリーは腹立ち紛れに弾幕を放つも、魔理沙はひよいひよいと回避していく。
「ああもう！」

「いつもいつもちよこまかと鬱陶しいのよ！」

パチュリーは忌々しいと言わんばかりの顔で憤慨する。

「へへん、当たらなければどうということはないんだぜ？」

「やーい、悔しかったら当ててみるよ、ほらほらほらほら〜」

そんなパチュリーを煽る魔理沙。

「なんですっ…ゲホッ…ゲホッ」

パチュリーが咳き込む。

「あー、そろそろ潮時かな」

そう言ってくるりと後ろを向き、入ってくる時空けた風穴へと向かう。

「じゃあなパチュリー、また今度ー！」

「こらーっ!!待ちなさああああい！」

パチュリーが手を振りあげて叫ぶも、魔理沙は止まらない。

「じゃ、達者でな！」

「その前に——本は返そっか」

「!？」

魔理沙の後ろに立つ者が1人。

「誰……？」

パチュリーは怪訝な顔をしている。

「お前は……幻佑！」

幻佑は、魔理沙に向かって

「奇遇だねえ、こんなところで出会うなんて。

一体全体何をしているんだい？」

とわざとらしく言った。

「ふん、お前には関係ないだろ？」

私は帰るんだ。そこをどいてくれ」

魔理沙はそう言って、幻佑の横を通り抜けようとしたが、

幻佑が魔理沙の手を掴んだ。

「待った。

その手に持つてる本を借りる許可は取ったの？」

「…必要ないね。私は顔パスが効くんだよ」

顔を逸らして言う魔理沙だったが、

「そんなもの許可した記憶はないわよーっ！」

遠くからパチュリーと呼ばれたパジャ魔女が叫んだ。

「ですって」

「むぎぎぎ…余計なことを」

「余計なことつてなによ！」

あなたが持つて行つた本の中で、

今まで私の手元に返つてきた本はないでしょー！」

話を聞くかぎりどうやら常習犯のようだ。

「詳しい話は署で聞くから、ね？」

「ね？じゃねえわ！いいからそこを退けて…！」

イライラしたように魔理沙が手を振り払うが、幻佑はどけようとしな

「あああもう！どうしてお前はそこまでパチュリーに肩入れするんだよ！」

怒鳴る魔理沙に対し、幻佑が言い放つたのは…

「いや肩入れも何も、僕は知り合いの犯罪を未然に防ごうとしてるだけなんだけど…」

「……………」

「……………」

ト正論。

「もう窃盗未遂だと思っただけれど……」

「それ気にしたら負けです」

「いや、私被害者……」

「それも気にしたら負けです」

「……………」

「……あー……っ！もういい！私帰る！」

子供のように吐き捨てて、

魔理沙は急いで箒に飛び乗り、飛び立った。

「あつ、待ちなさい！」

パチュリーが魔法弾を撃とうとするも、

魔理沙は飛び去ってしまった。

「……また……やられてしまった……」

その場にへたり込むパチュリー。

幻佑はパチュリーに近寄り、

「残念でしたね……これでも読んで元気だしてください」

と言って、ある本を差し出した。

「そうするわ…って、この本…!」

その本とは…

「ええ、魔理沙が持つて行こうとした本ですが…どうかしましたか?」

パチュリーは、口をパクパクさせながら、

「嘘でしょ…一体どんな方法で…?」

とだけ言った。

「ああ、これです」

そう言つて幻佐が取り出したのは、

「何これ…? ゴムの球体…?」

「スーパースポールつてやつです。」

残念ながらポケモンは捕まえられません…」

「…? どういうこと?」

首を傾げるパチュリー。

こういうどうでもいいタイミングでポケのための知識がちよつとだけ思い出せたりするのだが、残念ながら通じなかつたようだ。

「いえ気にしないでください。」

「それで、何をどうしたのよ?

今度からそれで対策立てるから」

目を輝かせて聞いてきた。

「あー…『ぶんどる』の応用って言って分かります?」

「全く分からないわね」

「さいですよね…」

紅魔館から全速力で飛び去った魔理沙は、ある程度離れた空中で静止した。

「ぜえ…はあ…ここまで来れば大丈夫だろ…」

深呼吸して、気持ち落ち着かせる。

「しかし…なんで幻佑が居やがったんだ?」

まさかとは思いが雇われたって訳じゃあないよな…って、あれ?」

そこまで言っつて、魔理沙は自分が本を持っていないことに気がついた。

「どこかで落としたり? いや、私に限ってそんなことは…まさかアイツが…!?!」

幻佑がとった方法は、実にシンプル。

スーパーストールを用いて『ぶんどる』を行う、たったそれだけである。

古来より投擲武器やボールで、大小関わらず色々なアイテムや武具を『ぶんどる』

とができていたのでもしかしたらと思つて試して見たのだ。

幻佑は非殺傷性のスパーボールを投げて魔理沙に命中させ、本を回収。

魔理沙はそれに気が付かなかったのだ。

正確には何かがつかつた感覚はちよつとだけあつたのだが、それを気にかける余裕もなく飛び去つてしまった。

ちなみに、本はボールが手元に戻つてきた時点で出現。

本がくつつついてボールが戻つてくるシユールな絵面も想像していたが、そうならなくてほつとした反面ちよつと残念でもあつた。

「という訳です。」

「ふうん…なかなか面白い能力ね…」

魔法で再現出来ないかしら」

幻佑の解説を興味深そうに聞くパチユリー。

「そういえば貴方、名前は？」

「ああ、名乗つてませんでしたね。」

僕は究 幻佑といいます。

「ここには咲夜さんを追つて来たんですけど…」

「あ…咲夜は多分…いえ、なんでもないわ。」

それと魔理沙のことを知ってたみたいだけど、一体どこで知り合ったのかしら?」
「魔理沙とは博麗神社で。」

出会い頭に弾幕勝負申し込まれて…」

幻佑の回答に、

「そう…あなたも苦労したのね…」

パチュリーは同情というか、

仲間が見つかって良かったみたいなお表情で答えた。

「…さっきから気になってたんですけど、あそこで本に埋もれてる誰かは掘り出さなくてもいいんですか…?」

ふと、幻佑が思い出したように言った。

「…あっ」

「もしかして、忘れてたんじゃ…」

「わ、忘れてなんかないんだからね?」

(忘れてんだ…)

「とにかく!アレは別に助け出さなくてもいいわよ」

「え、いいんですか?」

てつきり助けるのかと思っていたんですけど…」

幻佑が聞くと、

「最近アレもなんかウザかったし、そろそろお仕置きが必要だと思ってた所だったから。しばらくそのままでもいいわよ。」

無慈悲な一言。

「…すみません…調子こきました…助けて下さい…」

本の山から声が聞こえた。

「ああ言ってますけど…ほんとに大丈夫ですか？」

幻佑は心配になって再び訊ねたが…

「あら？そんなに心配なら」

あなたが何とかしてもいいのよ？」

「え？」

予想外の返答が返ってきた。

「その代わり何があっても私は一切口を出さないから」

「それって…助けたら」

『ぎゅんねん♪私はすこぶる元気でしたあ♡』

本気になっちゃってかわわいい…ぷーくすくす…』とか言われたりするからですか

「？」

幻佑がさつき聞いた声を真似しながら理由を聞いた。

「……………」

突然の女声に一瞬無表情になるパチュリーだったが、

「……………」私だったらそう言われるだろうけど、

あなたの場合ちよつと違うでしょうね。

…あと今の声どうやって出したのよ？」

ドン引きしながらも答えてくれた。

「違うんですか…？じゃあ一体…あと今のは

『ものまね』です」

「そう…あなた多芸ね。

それはそうと、理由はやって見たらわかるわよ…

特に貴方は男だから——ね」

「うーん…何が問題なんだろう」

そう呟くと、幻佑は本をサクツと片付けるために合成魔法の詠唱（と言っても詠唱はほとんどいらないのでそんなに大掛かりなものでは無いが）を始めた。

合成魔法とは――

幻佑がFFの魔法を元に2つ目の能力で作り出した、

魔法と魔法を組み合わせてあーしてこーして（本人談）目的のために最適化した魔法である。

今回幻佑が使うのは、彼が飛行にも用いている、『グラビデ+レピデト+トルネド』の3種類の組み合わせ。

レピデトで浮かせ、トルネドとグラビデで高度調整を行う。

「やってることはシンプルだけど」

その割に難易度がえぐいのよね」

おっと、いきなり誰か入ってきましたね…

誰ですかあなた？

「解説はメタ空間ですもの。」

まだ出番のない謎の美少女が登場したって

何も問題はないでしょう？」

まあいいですけど…あなた少女って言うには

「うおっほん！では失礼して…」

この魔法の最大の難所は、オリジナルとなっていて魔法をどれだけの出力でどんな方

向に振り分けるかというところにあるらしいの。」

そう。この方法を採用する場合、出力調整を行うにも相当な精密作業能力がいる。

本来ならリンゴーつ浮かせるのにもかなりの集中力を持っていかれるのだが、そこは幻佑。

「能力によって自動調整が行われている、ということね」

だからこそ、彼が飛行している際に余計な気を使わなくてもいいのである。

MPを幾ばくか消費するが、割と低コストで運用できるので優秀な飛行手段となっているのである。

ちなみにエアロ系の魔法でなくトルネドを用いている理由は、トルネドが直接的に風を操る魔法なのに対して、エアロ系は風を刃に変えるというプロセスを経るものであるのと、試運転中一応試してみた結果持ち上げる物によって上級魔法のエアロガでも出力不足に陥る場面が何度かあったからである。

トルネドだとオーバーパワーになりそうだが、

飛行したい高度に応じて出力が自動調整されるようにしているので大丈夫。

以上、いつもより長めの解説でした。

「またねえー」

幻佑の合成魔法によって、大量の本が徐々に浮かび上がって行った。

「おお、すごいわね」

「本の順番はどうしますかー？」

念の為パチュリーに本の仕分けについて聞いておく。

「後で小悪魔にやらせるからテキトーでいいわよー」

「わかりましたー」

——私は小悪魔である。

名前は特にない。

この図書館で小間使いとしてこき使…もとい、書庫整理などの仕事を任されていま
す。

今でこそ位の低い悪魔を演じている私ですが、

これでも実は名のある大悪魔と淫魔の間に生まれたハーフであり、かなりいい所のお
嬢様だったりするのであります。えっへん。

…まあ、実力は並の悪魔とトントンなんですけどね。

それはさておき、

そんな私がこの図書館で働いている理由は、私が今の主人であるパチュリー・ノーレッジによって召喚され、召喚者権限によって縛られているからです。

当時の私は、魔界からフラフラ現世に現れては男を誑かしてナニして得た精りよ…生命力で力を蓄えていました（むふふ）。

だから女の魔法使いに興味なんてなくて、

帰らせると喚き散らしてパチュリー様に戦いを挑むも敗北。

仕方なく、ここで働くこととなった次第でございます。

パチュリー様も最初は手を焼いていたけれど、

働いていくうちに私も彼女のことを信用して、徐々に大人しくなって今に至ります。

まあ、たまにからかったりして怒られてますけどね。

さて今現在の私ですが、本の山の下敷きとなっております。

なぜそんなことになったかと言うと、

霧雨魔理沙とパチュリー様の戦闘中、未処理の本の山に流れ弾が命中。

運悪く近くにいた私はその崩落に巻き込まれ、現在に至ります。

一応中の私は無事な空間を確保してあるので平気といえれば平気だったのですが、パチュリー様が私を懲らしめようとしてるっぽいので平気じゃなさそうに答えておきました。

出てきた時に思いっきりからかって差し上げる予定でしたが…

なんか、もう1人來客があったようで、その人が私を掘り出してくれるようです。

しかも、珍しく男の人だそうで。

「ふむふむ…どんな人か気になりますねえ…

ちよつとからかってみましようか…全力で。

ふふふ…」

前に男の人間と会ったのは何年前だったつけ、

とか考えながら、救出されるのをにやにやししながら心待ちにしているのであります。

さあ、ご開帳——

全ての本をどかした途端——

「ゲツチューー！」

「わぷっ」

中から1人の女性が現れ、幻佑に飛びかかって来た。

そしてそのままスルスルと絡みつかれる。

ピンクがかった赤い髪に、頭に一對、背中に一對の小さな翼。

悪魔のようなしつぽを生やしていて、

白いYシャツに赤いネクタイ、黒のベスト風ワンピースを着ている。

「あーあ…」

遠くでパチユリーが顔に手を当てるのが見えた。

(うーん、このことだったのかな…?)

「だ、大丈夫ですか?」

とりあえず声をかける。

「はい。この通り元気ですよ?」

その彼女はニヤニヤと妖艶な笑みを浮かべて答えた。

「私は小悪魔です。名前はつけられておりませんので、どうぞご自由にお呼びください。」

そう名乗る間にも、その腕は徐々に幻佑の顔の方へ伸びてゆき…

「……何してるんですか?」

「ふふふ…そう緊張なさらないでください」

左手は首の後ろ、右手は幻佑の顎に添えられた。

所謂顎クイ体勢である。

(……どうすればいいんだろ)

男子にとつては夢のような状況のはずなのだが、幻佑は何故か動じない。

(なんか……嫌な予感が……)

幻佑の中で警報が鳴り響く。

このままだと『図書館が』ヤバい。

「よく見ると好みの顔してますねえ……

ここで頂いちゃいましょうか」

そんな幻佑の思いを知らずに、

とんでもないことを言う小悪魔。

「他所でやりなさいよ……というかやるな」

パチュリーはどこか達観したような表情でツツコむが、小悪魔は無視して、

「それじゃあ、いただきま——」

と幻佑の顔へと迫った、その時……

ドゴオオオオオオン……

「おう…濃の幻佑に手を出すとは…

いい度胸では無いか…ええ？」

幻佑の予感が的中してしまったのであった。

「あああ…壁の穴が広がっちゃってるう…」